

戯曲 袴垂れはどこだ一八場

福田善之

人 物

じいさまと七人の村人

小菊

男

役人（後にもと役人）

下人三人

夢の美女（高・太・小）

夢の牛・馬・村人など

場 割

一 いつか、夜ふけに蹄の音が……

二 本物が来なければイツソ俺たちが

三 かけぶとんは天でしきぶとんは地面

四 お前をたすけたのは袴垂れだ

〈幕間狂言〉

五 コイツ胡散くさい奴だ

六 袴垂れさまはそうはしねえ

七 本ものさまとも存じませず

八 サア旅をつづけよう

「今昔」「宇治拾遺」などの物語によれば、平安のころ、都に袴垂はかまたれる「ぬす人の大将」がいた。たぐいまれなその度胸といい、神出鬼没の早業といい、とても当時の役人どもの手におえる男ではなかったらしい。国定教科書「国語」巻九の第二十三にある話は、今昔物語から採られていて、その名だたる大盗といえども、「その頃武名かくれなき藤原保昌」の威厳には齒が立たなかった、ということになっているが、その保昌の弟保輔こそ実は袴垂れである、という説も、また、ある。表は役人、裏は盗賊、という二足のわらじをはいた男、ということになると、要するに当時の世相を典型的に表現した人物である。

たぶん「袴垂れ」はひとりではなかったのにちがいない。初代袴垂れの名がたかまると、つぎつぎその名をいつわるもの、あるいは、われこそは何代目袴垂れ、と堂々名乗りをあげるものなどがあらわれた。つまり、それだけその名には人気があり、利用価値があった、ということになる。やがて彼の名が義賊の代名詞となり、権力にたいする抵抗の象徴とみなされるにいたったのは、きわめ

て自然ではないか。下って室町のころまで、「袴垂れ」を名乗る義賊・俠盗の群れは絶えることがなかったという。

さて、そこでこの芝居の「時」は、平安から室町までのいつでも、ということにしよう。ある寒村に、飢えて瘠せおとろえた旅の坊主がやって来た。親切な村人たちの介抱にもかかわらず、やがて彼は死んだ。そのさい彼は、たぶん村人の親切にむくいるために、つぎのような予言をのこした。いつか、袴垂れの党がやって来て、虎よりも猛き苛政にくるしむこの村の人びとを救うであろう。——ということから芝居ははじまる。

暗いうちに幕があがる。

吹きすさむ風音。

おこそかな声

無明の風に修羅の雲

阿弥陀来迎嘘ばかり

あわれなるかな草も枯れ

鳥もうたわぬ世なりけり

薄明かりの中に主人公である村人たちの姿が浮かぶ。

村人たち どこにいる

袴垂れは

袴垂れはどこだ！

音楽。

一 つか、夜ふけに蹄の音が……

寒村、夕焼。

新しい卒塔婆の前に、じいさまと七人の村人。

じいさま (沈黙を破って) やい。……まず、ええ坊さま
だったな。

一同 (実感をもって) んだ。

じいさま (間ののち) 気の毒な坊さまだっただ。

一同 (実感をもって) んだ。

村人一 (間ののち) ちょうど、こんげな夕焼が、どろり

と血だらまっかに雲を染め上げとる夕がたのこったわ、
おらが、村はずれの峠道で、杖を片手にうっ倒れとるあ

の旅の坊さまをみつけたのは――

村人四 んだ。おらが引つちよってじいさまの家まで運んだだが――なんせ、枯れッ葉みてえに痩せこけた坊さまだで、おら、かついで歩ゆんどるうち、ふいと、かついどることを忘れちまいそうなくれえだつただ――

村人三 おらたち、かわるがわるに介抱にかようただが――つまりは、そのまま枕のあがらずじめえだ。

村人六 (泣く。この男、すぐ泣く)

村人二 (若い) 運がなかっただよ。え？ ながえ旅路を歩ゆんで来ての果てが、こんげな国のこんげな村だ。

村人四 かゆを食わせてえにも、村じゆう一粒の米もねえちゆう村だ。

村人七 も、もしも、よそ国のもんを養のうとるなんちゆうことが役人に知れたら、村かた総勢ひつくくられて、そのうえ年貢は倍になるちゆう村だ。

村人二 へっ、どうで病いのよくなりようがねえだよ、この村じゃ、この国じゃ。

村人五 (ぼそりと) んだ。

間――

村人一と三 (同時に) けんど――

おどろいて二人顔を見合わせる。一同も二人を見る。

村人一 (三にゆずられた感じで) けれど、遠い国にやもつとひでえ村が、あるちゅうだな。

村人二 へっ、この村の役人よりむげえ役人のおる村が、あるもんだか。

村人四 んだ、この国の地頭より欲たかりの地頭のおる国が、あるもんだか。

村人一 いや、そらアな——(といいかけると)

村人三 あるちゅうだよ。

一と三、うさんくさそうに顔を見合わせる。

村人三 (二と四に) そんな国のそんな村ばかりだちゅうぞ。

村人五 誰に聞いただ? そんな話。

村人一と三 (同時に) そら……(顔を見合わせる。また同時に) 誰っちゅうことも……(顔を見合わせる。また同時に) ねえ……

間——

村人二 (さぐるように) ふん、この村よりくらしのつれ
エ村があつたら、おおかたそこにや、人はおりやしねえ
だな、なあ。

じいさま いや、おるちゆうだな。

一同、じいさまを見る。

間――

村人四 (さぐるように) んでも、そんげなとこじや、生
きちや行けめえに。なあ。

じいさま いや、生きとるちゆうだな。人はどこでも生き
とるちゆうだな。

村人一と三 んだな。(顔を見合つて、たがいにならず
く)

間――

村人二 (じろじろ他の連中の顔を見ながら) んでも、も
しもおらたちよりも辛え暮らしをくらしとる衆たちが万
が一あつたとしたなら、いってえその衆たちは何をたよ
りに生きとるだかなあ。

間――

村人七 そら、いつか夜ふけに——（あわてて口をおさえる）

村人四 夜ふけに、何だ？

村人七 い、いや、何でもねえだ。

村人六 夜ふけに、何が来るちゆうだ？

村人七 し、しらねえだぞ。おら。

村人二 （六に）やい、こいつ（七）はいま何かが来るな

んぞといいやしなかつただぞ。お前こそ、何だちゆう

だ？ 何をいいてえちゆうだ？

じいさま やい、しずかにしねえだか。（立ち上がって）

……どうやら、みんな知つとるらしいだな。知つとるく

せに、口には出したがらねえだな。

間——

村人二 おら、知らねえだぞ何も、じいさま。知らねえだ
で、きいとるだわ。

じいさま うそつけ、お前が一番しげしげと通うて来とつ
たでねえだかよ、あの坊さまのところに。てめえは草の
根っこを噛んでも、坊さまにや粟のかゆを運んどつたで
ねえだかよ。

村人二 へっ、あげな坊主の世迷い言ことだれが。

じいさま へっへ。おらの見るところじゃ、お前、信じた
くてしようがねえだで信じねえちゆうてさわぎてえだ
な。

村人二 ば、ばかぬかせ。おら、ほかの衆もみんな、おら
みてえにあの坊さまの話聞かされとるとしたら、とか
んげえただわ。

じいさま ふん。んで？

村人二 あげな世迷い言を信じる衆もおりやしねえか、と
かんげえただわ。

じいさま ふん、んで？

村人二 んで……もしも、おったなら、こういうてやりて
えだわ、その衆に。あら、うそっぱちだぞ、あげな、い
つか、荒れ野っ原に風が吹きまくる夜ふけに、きつと—
—なんぞツちゆう、そげなでたらめを、

村人四 ちがうだわ、坊さまはこういうただぞおらに。い
つか、野ずらを—野ずらちゆうただぞ、たしかに。野
っ原なんぞじゃねえぞ—野ずらに、風の吹きわたる夜
ふけに—

村人六 そうではねえ、吹きすさむ、だ、吹きすさむ夜ふ
けに—

じいさま 夜ふけちゆうことはたしかだな、とにかく。

村人三 かすかな、清らかなひずめの音が聞えてくる—
ツちゆうだ。

一同 (口々に) んだ、そうだ、ひずめの音だ。

村人一 それがおおぜいの、嵐のような駒の響きになり

一同 んだ、嵐のような――

じいさま うむ。つまり、それが――

一同 (同時に) はかまだれだ。

間――

じいさま うむ、どうやらたしかに、みんなおんなし話を

聞いとるだわ。……おらの聞いた話の眼目はな、ちかごろ、都あたりに袴垂れちゆう盗賊のあつて、金もち長者から金銀たからを奪いとり、それをのこらず貧乏人にわけあたえる、と――

村人二 んだ。一人ではねえ大勢だで、袴垂れの党、と名乗るちゆうだ。

村人三 役人がどんげにしんぐまんぐつらまえようちゆうて骨折つても、影みてえに消えちまう、ツちゆうだな。

村人四 都ばかりか諸々方々の国々村々へ、風みてえにさあつと来てひゆうつと去るだわ。

村人一 袴垂れの党のおつてすぎたあとは、地頭役人がのこらずほろびて、おらたち百姓が安気におつちらと暮らせるあたらしい世が来るちゆうだな。

村人五 この国のこの村みてえなひでえ暮らしも、いつか、袴垂れが来れば――

村人六 袴垂れが来れば、立ち枯れた木にも花がほつかりと咲いて――

村人三 犬も走れば牛もうなり、にわとりも声張って朝を告げるだぞ――

村人七 女子の乳もふくらんで、ガキもころころ太るぞ――

村人一 まだまだおらたちのみたこともねえみてえなしあわせが、いつか、夜ふけに袴垂れの党が駒音鳴らして寄せて来たその朝のしらしらあけにやあ、やって来とる――と、こういうただな、あの坊さまは。

一同 (力づよく) んだ。

間――

じいさま ふむ。やっぱ、みんなおんなしことを聞いたるだな、たしかに。

一同 んだ。たしかだ。

間――

村人七 けんど、その……

一同 (七を見る)

村人七 い、いや、べつに何でもねえだ。

じいさま 夢みてえな話だ、ちゅうだな？ まったく夢だ

としか思いようがねえ話だ。

村人一 けんど、じいさま、手前がやがておつ死ぬとわか
つたいまわのきわに、人間嘘はいえねえもんじゃあるめ
えかな？

村人三 んだ、嘘吐いて三文の得もねえで。

村人七 そらそうだ、得はねえで。

村人六 あの坊さまがでたらめこく坊さままたあ思えねえで
よ、おら…… (泣く)

村人四 んだ、まったくだ。

村人五 おらも、そう思うだな。

村人七 んだんだ、おらもそう思うだな。けんど……

一同 (七を見る)

じいさま けんど、何だな？

村人七 い、いや、その……つまり……おら、おもうに、

袴垂れさまは、ほんまにありがてえ……けんど、その……

……役人衆も強え、強え上に、おおぜいだで……なんぼ袴

垂れでも——

間——

村人七 (気配が不利なので) い、いや、こらたぶん、ま
ちごうとるだと、おらおもうだがな、おもいてえだが
な、その……(四と二がそれぞれぬつと立つのであわて
て) いや、おらはまちごうとる、たぶん、いや、たぶん
ではねえ、きつと、たしかに……

村人二 負けやしねえだよ、袴垂れは、どんなもんにも！
負けるちゆうことをてんから知らねえちゆうだ、
袴垂れの党は！

村人四 んだ、役人だろうと地頭だろうと、

村人二 ええだか、おら、袴垂れが来たら、子分になる
で！

村人四 おらもだ！ 頼んで仲間に入れてもろうて、

村人二 袴垂れの党の一人になるでよ、おら。それで、村
から村へ風みてえにつっぱしって――

村人四 おらたちの村みてえにつれえ暮らしを送つとる村
の衆を、およばずながらもおたすけ申してえちゆう心
だわ、うん。

村人五 けんど――

一同、村人五を見る。

村人五 (妙に思いつめた声で) いつ、来るだかな、袴垂
れは？

間――

村人一　いつか、来るだ。……きつと、いつか、来るだ。

間――

村人三　待つだわ、こらえて待つだわ。これまでもおらた

ち、よろず何でもこらえて来ただぞ。

村人一　いずれきつと来る袴垂れを待つなら、こらえ甲斐もあるうちゆうもんだ。

村人二　んだ、これから先ア、役人どもがどんげにおらたちをいたぶろうと、

村人七　地頭が新手の税を案じ出そうと、

村人四　んだ、いまに袴垂れが来るだぞ！

村人一　日でりばかりがかつかつと照って、そのあと長雨がしよぼしよぼつづいて、そんですぐと凍える冬で、噛む草の根っこも木の皮もねえ年が来たにしても、おらたち、もう、こらえられねえちゆうことはねえだ。

村人三　んだ、おらたち齒噛みしばってこらえて待つだ。

いまに袴垂れが来るぞ。なあ？

一同　（確信をもって）んだ。

村人六　（感動して泣く）

じいさま ふむ。まず、そういうこつたな。そこでおらがちっとばかり気になるのは、ゼンテえあの坊さま、なんでおなじ話をおらたち一人ひとりに、それもわざわざほかの誰にもいうなちゆうて話してくれたもんだか……だでおらたちは、めいめいそれぞれの心に、坊さまの話をかたくしまいこんでしもうて、だでますます……

村人三 じいさま、その、おらはな、あんまりええ話だもんだで、こらどうしてもほんまの話であつてもらわねばなんねえと思うて……

じいさま だで、人に話しまうと、もしやふつと消えちまいはしねえかと思うただな。

全員顔見合わせてうなずき、何となく笑う。

じいさま (つぶやくように) とにかく、ほんまかうそかちゆうても、みんなもおらもほんまだと思いてえからにやほんまだと思うしか手はねえだし、待つのを待たねえのちゆうても待つよりほか出来ることはありようはずがねえだし。

村人一 なんだ？ なにぶつぶついうとるだね、じいさま。

じいさま いや、何でもねえだよ。うん。

いつのまにか、とつぷり日が落ちた。
暗転。

暗いうちに風音。

やがておごそかな声音が――

おごそかな声

人のこころのかなしさと

優しきおもいあるかぎり

やがて聞ゆる蹄の音

名ある義賊の駒あらし

効果音にて、一騎美しい蹄の音。

それがやがて多数の、怒濤のごとき大軍の感じと
なり、消える。

風音のみ、しばし。

村人たちの声

袴垂れはまだだか

袴垂れはまだだか

袴垂れはまだだか

風、はげしさを加える。

おごそかな声

人のおもいのふかければ

ウソがまことか虚が実か

やがて聞ゆる蹄の音

降魔の剣破邪の剣

二 本物が来なければイツソ俺たちが

一年のち。

つぎの叫び声であかるくなる。

村人二 (興奮しきって) おい！ 袴垂れが来たぞ！

村人四 (同じく) とうとう来たぞ、袴垂れが！

おなじ寒村のべつのところ。

夜あけごろ。

彼方に館が燃えているのが見える感じ。

村人たちが狂喜してかけまわりながら叫びかわす

さまつぎのよう。

村人二 ゆんべ、地頭の館に斬りこみがあっただ。地頭の

伴が斬りころされ、家来どもはわっちゅうて逃げてしも

うたちゅうだ！

村人四 なんせ名高え袴垂れだ、奴ら、神楽舞い舞って一

散走りよ！

村人二 みれ、山の上を！ めらりめらりと燃え上がつて
るが地頭の館だわ！

村人一 とうとう来ただな袴垂れさまが！

村人三 袴垂れさまがやっぱ来ただな！

村人一 いつのまにやら来とつただわ！

間――

一同、ぼうぜんと彼方の地頭館の方角を見つめる
(客席の方向がいいだろう)

村人一 (うわごとのように) これで、地頭もしめえだ
な。

村人四 (おなじく) 花が、咲くだ。

村人七 (おなじく) 犬が啼くだ。

一同 (同時に) 見たこともねえ世が……

一同、へたへたと坐る。

村人六が、突然泣き出すので、皆びくつと腰を浮
かす。

村人一 何だ何だやい、こんげなときに泣くちゆうやつが
あるもんだか。

村人六 んでも、おら、へえ……（泣く）

村人七 （突然、これも涙で）お、おら、この一年、夜ふけになると美しい清らかな蹄の音が聞こえてこねえもんか……毎晩、日が落ちるとはやばやと寝て、夜ふけに起きて夜なべをしながら息を殺して、耳をすまして、朝があけるとがっさりと寝て……それが、ゆ、ゆんべだけは、うっかり炉ばたにつっこけて、ぐっすら眠りこんじまっとなつただわ、おおう……（と泣く）

村人三 （突然これも泣きだして）お、おら、申しわけねえだ相すまねえだ。おら、もしや袴垂れさまはもう来ねえじゃあるめえか、旅の坊さまはそらごとこいたじゃあるめえかと……もうしわけねえだ袴垂れさま、どうかごかんべんくださりませ、おらをお許しく下さりませ（と頭をすりつけて、地頭館のほうを拝む）

村人一 （これもつづいて同じ方向を伏し拝み）ありがとうござえます袴垂れさま、おらたち、なんぼおいでをお待ちしとりましたことか。

村人二 ありがとうござえます袴垂れさま。

村人四 よくおいでくださいました袴垂れさま。

村人七 よくいらつしやいました袴垂れご一同さま。

村人三 いらつしやいましたいらつしやいました。

村人六 （声をあげて泣く）

間――

村人二 やい。こら、ちっとおかしいだぞ。

村人たち 何だ？――そらまたどうして――おかしいたあ

どんげなわけだ――袴垂れさまをおかしたあどうい

つもりだ。(など口々に)

村人二 (四に) やい、屋形が燃えだしたなあもうだいぶ

ん前だな？

村人四 んだ、ほれ、もうそろそろ焼け落ちるだわ。

村人二 つまりもうずいぶんと時が経ったちゆうこつた。

けんど一向に袴垂れの党の衆が見えねえのは、どんげな

わけだ？

村人六 んだ。袴垂れさまはどこにいるだ？

村人七 どこへ行っちゃまっただか、袴垂れさまは？

間――

村人一 そらあ、まあ、さあつと来て風みてえにひゆうつ

といっちまうが、袴垂れさまで……

村人三 んでもひと目お目にかかって、

村人六 お礼のことばの一つもよ、

村人七 さしあげてえもんだに、

一同 そらそうだ、まったくそうだ。

村人二 おら、どんげにしてもお目にかかって――

村人四 んだ、お仲間入りをおねがいせねばなんねえで。

村人二 ああ、おらいつてえ、おら、どうしたもんだ——

村人七 んでも、いくら風だちゆうても、まだそんげに遠

くへは行くめえに。

村人二 んだ、これから追うてったら、どんなもんだ？

村人一 けんどぜんてえ、どっちへ追うてくだ？

村人三 んだ、つぎはどこへ吹いてくだやら、てんとわか
らねえつむじ風さながらちゆうのが、袴垂れさまだで。

一同 (口々にざわめく)

村人五が疲れ果てたすがたで、すこし前から登場
して、この時はじめて口を開く。

村人五 ちがうだよ……

じいさま (気がついて) や、五郎次、お前、どこへ行つ
とっただ？

村人五 地頭屋形よ。

一同 (口々に) なに、地頭屋形？——どんげなくあいだ
あつちは？——袴垂れさまに会っただか？——袴垂れの
党を見なかっただか？——袴垂れの党の衆は？

村人五 来ねえだよ、袴垂れは。

一同 (口々に) なんだと？——そら、なんのこった。ぜ
んてえ？——や！ 手前、のうてっぺんから足の爪まで

——血だらまつかでねえだかよ！

村人五 袴垂れは、来はしなかっただ、ちゅうとるだよ…

…

村人四 ば、ばかぬかせ、なら——

村人一 なら、地頭館のさわぎは——

村人五 おらだよ。

村人たち な、なに？

村人五 おらのやったこった、ちゅうとるだわ——（いいも終わらず、ふらふらと倒れかかる）

一同、あわてて五を支え、介抱する。

村人たち （口々に）こらどうだ！——やいこら、しつか

りするだ五郎次！——しゃんとしていちぶしじゆうを語らねえだかやい——おら、何が何だか——さっぱりとわからねえようになっちまったぞ——やい五郎次、しっかりと語るだ！——

村人五、われに返ると、あわててみんなをふり払

い、

村人五 は、はなしてけれ、寄、寄らねえでけれ、おら、

大、大罪人だで！

べったりと坐りこむ。

じいさま

(ざわめく一同を制して) 話してみれ、五郎次

……やい。

村人五

お、おら、地頭の息子が、おらの……

一同、しんとなる。

じいさま

(沈うつに) 聞いとる……お前の妹が無理無体

に召しあげられてもどされねえだでねがいに行ったら、

こんだおめえのかみさんが。だでまたねがいに行ったら、

こんだお前のおふくろが。やつとこゆんべもどされたと

きにや、みんなむくろになつとつたちゆうだな。それを

おれたちや見とるに見ねえつれ無し顔、どげにもこげに

も……

村人二

齒ア噛みしばって思うとつただよ、いまに、袴垂

れが来れば……

村人五

んだ、それだで……おら、ゆんべ、あとさきしら

ねえ心持ちで地頭やかたにしのびこんで、地頭の息子を

なぐりころして、声はりきって呼ばつただわ、思わず知

らず呼ばつとつただ、袴垂れが来たぞ、われこそは袴垂

れ、袴垂れがやって来たぞオ!

一同 やああ（どよめく）

村人五 したら子分ども、おらのすがたもみずに、一散走りに走って逃げてしもうただわ……

一同 （声なくどよめく）

間――

じいさま ふむ。袴垂れでは、なかつただか。

一同 袴垂れでは、なかつた……

間――

村人七 た、たいへんだ、もし袴垂れではなかつたとわかったなら、

村人一 んだ、今日のうちにも役人ども、

村人三 とつて返して寄せてくるではねえだか？

一同 ど、どうしたら、こら、ええもんだ（などどどよめく）

じいさま やいやい、そんげにあわてることは何ひとつい
らねえだぞ。役人ども山向うの大地頭のどこまでつっ走
って行ったにまちがいはねえだから、とつて返すにした
ところが、こっちへ来るのは早くて夕方だわ。まだ日な
かいちにちじゅうぶんにあろうちゅうもんだ。落ちつく

だ落ちつくだ。……さてと、どうやら袴垂れはこの五郎次だったちゆうことになってみりゃあ、おらたちのまだみたこともねえしあわせちゆうやつも、さらりとご破算だな。

村人三 ご、ご破算だけですむことならええだがな。

村人一 こらとつてもすまねえだぞ。

村人二 村かた総勢一人のこらずつらまえられるぞ。

村人四 てつきりこらあしぱり首だな。

村人七 お、おら知らねえだぞ、何も知らねえだぞ。

村人二 知らねえちゆうてもしぱり首だわ。

村人七 やい五郎次、お前はいつてえなんちゆう、

村人四 ああ、おら、袴垂れさまにもまだお目にかかれね

えうちに――

村人六 (泣く)

村人五 (叫ぶように) も、もうしわけねえ、おらが悪い

だ、悪いのはおらだ、おらだけだ。さ、おらをしぱりあげてつき出してけれ、な、みんな。な、じいさま。

じいさま まあ待てや、待てや五郎次。やいみんな、お前

たちほんまにこの五郎次をしぱりあげてつき出す気だか？

間――

村人五 (べったりと坐りこんだまま) おら……地頭館で
あばれまくって引き上げるまでは、どうで命を捨てた覚
悟のくそたれきげんで、前も見えねえ、右左もねえ、の
ぼせ返った狂い犬さながらちゅうもんだっただが……け
んど、それから藪に逃げこんで朝までひっそりかくれと
るうち……体中ぞっぷりの汗もずんわりと冷えて、あた
まからひつかぶった返り血もでろりとこわばって……お
ら、いきなりでつくりおつかなくなつて来ただよ。もし
や、おら、途方もねえそらおそろしいことをやっちまっ
たではねえか——ツてかんげえてみたら、んだ、やつぱ
そうだ、おら人殺し、地頭ごろし、役人ごろしの大罪人
なんだツちゆうことが、ようくわかつて来ちまっただよ、
おら、一生、晴れてお日さまを拝めねえ身の上になつち
まっただよ——

間——

村人六 なんちゆう、はや、お前は……気の毒なもんだ……
……(泣く)

村人五 (立ち上がって) ンでは、皆の衆……これがたげ
えに見おさめだ……

村人たち どこへ行くだ？ 五郎次。

村人五 ……(とぼとぼと行きかける)

村人一 (ひきとめて) やい待て、役人に名乗りでるちゅうても役人はとうぶんもどっちゃ来ねえだぞ。

村人三 (ひきとめて) 手前がひとりでやったこんだちゅうても、どうで村じゅうひつくくられちまうだぞ。

村人七 ああ、せめて袴垂れさまが、はやく来とってくれ
たなら――

村人五 (突然、はじめてはげしく泣きだす)

じいさま (とび上がって) やいそれだ！ それだぞ！

一同 何だ、何だじいさま？

じいさま 袴垂れは、来とっただわ。

一同 何だ、何のこったそらあ？

村人七 来とったあ、どこへ来とっただ。

じいさま (五をさして) ここへ来とった。やい、かんげえてみれ、五郎次は地頭の息子を殺して役人を散らしただわ、こら袴垂れのやるちゅうこととおんなじでねえだか？どう控え目に見つもつても、袴垂れの仕事の前半分はやってのけたちゅうことにやなんねえだか？……(五に) やい五郎次、お前のやったこたアこれすなわち袴垂れ、五郎次さまはまず半分がた袴垂れさまだで……(一同に) やいお前たち、さつきからみとりやあ、袴垂れのやりたこんなら大喜びのちんちんおどりで、同じこんでも五郎次なら。どひようしもねえ極悪人だと面アしかめておめきたてるだか？……(五に) こわがることはいら

ねえだぞ、五郎次、お前が地頭屋形に討ち入りながら袴垂れだちゆうて呼ばったちゆうがもつけのさいわい、このままほっときやゆんべのさわぎは、やっぱ袴垂れのしわざだちゆうことになるだよ。実ア五郎次ちゆうにせの袴垂れのしわざだなんぞと、わかりっこはありはしねえだ。つまり袴垂れがさあつと来てびゆうつと——

村人一 け、けんどじいさま、役人たちのしらべはきびしいで！

村人七 (前に重なるようにして) き、きつと五郎次をみつけどすで！

村人三 (おなじく) みつかったら、そんでおしめえでねえだか？

村人四 (おなじく) やっぱにせむんだとばれちまうだぞ！

村人二 (おなじく) 袴垂れは来なかつたとわかつちまうだぞ！

じいさま いいや、んではねえ、役人たちにやみつからねえだわ。

村人たち 何だ？

じいさま そこはそれ、半分袴垂れだ、ひゆうつと風みてえに——とは行くめえが、いつのまにやら、もそもそと消えちまうだな、もぐらみてえに。

村人一 けんど、五郎次が消えちまえば、のこったおらた

ちが――

村人二 んだ、五郎次はどこへ行った、ちゆうて役人に――

じいさま おらたちも消えればええだな。

村人たち 何だ？

じいさま どうだなみんな、おらたちみんなで氣イそろえて、袴垂れになるッちゆうはどうだな？

村人たち (間) 何だ？

じいさま どうやらいつまで待ってもこの村にや、袴垂れさまは来ちやくださらねえ様子だし、ならいつそ、おらたちが袴垂れになればええではねえかな？……なんだみんな、そんげにあほらと口を開けて……

村人たち (あわてて) けんど、じいさま――

じいさま まあ聞けや、ええだか？ 五郎次ひとりで袴垂れのしごとの半分がたはやってのけただぞ？ もし、おらたち総勢かかったなら、さあ、どんなもんだ？……袴垂れちゆうても鬼じゃあるめえ、おおかた人だ。人ならおらたちもやつぱ人――

村人一 けんどじいさま、五郎次はおらこそ袴垂れッちゆうて呼ばったで、役人衆がわっちゆうて逃げた。つまりは――

じいさま だで、おらたちもよばるだ。袴垂れを名乗るだ。

村人たち お、おい、じいさま——

じいさま やい、わからねえだか？ どうでおらたち、すがたをかくさねばなんねえだぞ？ ならいつそこれからこのまま旅にぶつ立って、本ものにやどうでおよびもつくめえけんども、心だけは袴垂れの党、そのわかれだつちゆうつもりでつとめて行くだ——ツちゆうことはこれすなわち、行くさきざきの村々で、その衆たちをくるしめとる地頭や恨みを買うとる長者めらを、

村人二 (乗って——ほかの村人たちはあつ氣にとられてじいさまをみている) ふむ、どつとばかりにおそうだな？

じいさま そうは行くめえ、本ものとはちがうでな、うむ。まずは根気よくしらべるだな。どこから屋形へしるび入ってどこをねらえば、まんまと金目のもんがぬすみだせるか——

村人二 ふむ、どこへ火をつければ、役人どもの眼がそれるか。

じいさま んだんだ、じつくりねんいりにしらべあげてから、ゆつくりとかかるだ。

村人四 (これも乗って) そんげにまだるっこしいかなあ袴垂れは、風みてえにさあつと——

じいさま しかたねえだわ、おらたちはにせものだ。

村人二、四 (うなずいて) んだな。

村人一 (あわてて) や、やいじいさま、お前調子出して
へらりへらりまくしたてよるだがな、そ、そんげなこと
して、もしほんまの袴垂れに聞こえたら――

じいさま そこだで、ええか、にせの袴垂れが出来たちゅ
うらわさがほんまの袴垂れの耳に入れば――

村人七 そら怒るで！

村人三 さがしに来るでよ！

じいさま したらおらたち会えるでねえだか、待ちに待つ
とるほんまの袴垂れに！

村人一 (感心して――しかし賛成というわけではなく)
ふうむ！……そうだが、で、会うたらこういおうちゅう
だな、お名前をかたつたはなんとも申しわけござりませ
んが、これもあんたさまに会いたい一心、

村人三 (おなじく、かならずしも賛成ではなく) どうぞ
かんにんしてくださりませ、とこう行くだな？

じいさま どうだ皆の衆！ ただ待つとるよりは出かけて
つてさがしたほうが早えだ。それにはこらあいちばんの
早道でねえだかな？

村人たち ふうむ！ (とどよめく)

じいさま (ますます調子が出て) ええだか？ まず、お
らたちみかけは百姓で行くとすべえ。

村人六 んでも、なかみも百姓だで。

じいさま わからねえだなこのとろすけ、こころは袴垂

れ、正義の盗賊！

村人たち数人 んだな。

じいさま 景気が悪いだな、せいはいっておう！ と行け。

それ、

村人たち (つりこまれながらも、二と四以外はかならず

しも本気でなく) おう。

じいさま (ご機嫌で) よしよし。それからいうまでもね

えこつたが、たとえ相手が役人でも、無用な殺生は――

やれ待て、こらこうなったら おきて 掟をきめにやなんねえだ
な。

村人二 (喜んで) んだ、袴垂れさまの掟はきびしいちゆ

うでな。

じいさま よし、まずこう行こう。掟のいちばんはと、え

えだか。

村人たち (以下、前とおなじく) おう。

じいさま 掟は、かならずきつと守らねばなんねえ。……

これが掟の一、ええな。

村人たち おう。

じいさま 掟の二、たとえ、相手が役人でも、無用の殺生

はいけねえ。ほんまの袴垂れは人を殺さぬちゆうでな。

村人たち おう。

じいさま 女子どもにはことにやさしくせねばなんねえ。

ほんまの袴垂れのようにな。これが三だな。

村人たち おう。

じいさま 掟の四はかんじんかなめのとこだ、ええだか？
盗んだものは、全部、その村の衆たちにわけてやらねば
ならねえ。

村人たち おう。

じいさま おらたちの食うものだけは、これはとつとかね
ばなんねえけんどな。これを五とするべえ。

村人たち おう。

じいさま けんど、獲物のねえときで、おらたちが食うに
困ったときはと、——こんげなときでも、村の衆のもの
は芋ひとつでも手をふれちやなんねえ。ここが掟のきび
しいとこだな、うん。もし向うさんから食うてくれちゆ
うて出されたもんなら、

村人七 もろうて食うてもええだな？

じいさま いやいやそんげなときも、ただもろうてはなん
ねえ。お返しもんがねえなら、その衆の畑を手伝うなり
して働いて恩返しをする。これが掟の六。

村人たち おう。

村人五 (これまでずっと黙りこくっていたのが、突然、
叫ぶ) おら、だめだ！ 出来ねえだ、とても、いけねえ
だ、おら——

じいさま 何だ？ そらまたどんげなわけだ？ 五郎次。

村人五 袴垂れにやなれねえだよ、おら……おら、人ごろ

しだで。ただ、憎いばかりにぶっ殺しただよ。ほかのこ
たあ、何もかんげえちやいなかっただよ。おら、ただも
う憎くてぶっ殺してやりたくて、へえ……ちがうだよお
らのやったことあ、袴垂れさまとは……まるでちがう
だ。おら、どうで一生涯、お日さまを――

じいさま おがめるだよ。……すつきりはれやかな心地で
おがめるだよ、お日さまだろうと如来さまだろうと、袴
垂れに会えば。……ほんまの袴垂れさまに会って、ほん
まの袴垂れの党の一人になればな。……そんなとき、お前
の人ごろしは人ごろしじゃなくなるだよ。

村人五 ——なくなつて……なんになるだな？ じいさ
ま。

じいさま 世のため人のため袴垂れがほどこしてつかわし
た正義の刃^{やいば}、ちゆうとこかな。

村人五 おら、なぐりころしただよ、この手で。

じいさま んじゃ、正義のゲンコだな。

間――

じいさま 尾ツポ踏んでキャンと啼かした犬は面蹴ツとば
せちゆうだな……母食わば皿なめれともいうだな。

間――

じいさま どうだな、とにもかくにも行かねえだか？ お
らたちと。五郎次。

村人五 ……いつ、会えるのかな？ じいさま……ほんま
の袴垂れさまに。

じいさま いつか会えるだ。遠くのことじゃあるめえ。な
んしろこんだ、こっちから出かけて行くだからな。(一
同に) な？

村人たち おう。

じいさま ンでは、皆の衆。さつそくとぶつ立つべえ！

村人二、四、六 (威勢よく) おう！

一、三、七が、あわてて——彼らは半信半疑だつ
たので。また、威勢よく「おう！」といったなか
でも六はうろたえて、

村人一 や、やいじいさま！

村人三 お前、ほ、ほんまに、その、おッぱじめる気だ

か？

村人七 お、おつかないでよ、おら！

村人六 お、おらも……

村人二 やい、手前いま、おう！ ちゆうたでねえだか

よ！

村人六 そ、そんなでも、とほ、とほほ（泣く）

じいさま （きびしく）やい。ほかに、どんげな道がある

ちゅううだか？ おらたちに……やい。

暗転。（つぎの場への転換は、ながい時間が経つ

た印象をあたえないことがのぞましい）

三 かげふとんは天でいきふとんは地面

その A

峠の間道、暗い。

村人四がいそいでやってくる。貧しいなりの旅すがたで、鎌などを腰にぶちこんでいる。

村人四 （あたりを見まわして）やあい。……こら、だれもおらねえだな。まず今夜はひっそりこの峠みちに寄り会うてぶっ立つべえと約定し会うためでてえ門出に、いちばん乗りはこのおらだちゆうわけか。ふん。おら、ひよつとかすると一番おくれたではねえかと案じよつただが……ちゅうのは、なんせにせもんながら袴垂れの党の旅立ちだで、腰にぶっこむだいだんびらはありようがね

えにしても、つかい馴れとるこの鎌を、みがき上げてとぎすまして……ちゆうて念を入れとるうちに、ついうつかりと時がすぎちまつとった、ちゆうわけだ……（鎌を夜空にかざして）ううむ、月せえ出とりや、これでぎりぎりらりとたのもしく光るはずだが……

スキをかついだ村人二が、ふりむきながらやってくる。四につき当りそうになって、二人おどろく。

村人四 や、やい何だ。

村人二 何だちゆうは何だ。

村人四 や、二郎太だな？

村人二 四郎兵衛か。

村人四 遅えだぞ、やい。

村人二 ばかぬかせ。おら、とつくに来とつただが、誰のすがたも見当らねえもんだで、いまそつちの方を、

村人四 ふんふん、するツちゆうとお前とおらが一番乗りか。いつてえ、どうしたもんだほかの連中は？

村人二 んだ、おらのおもうにや、こら、中にや臆病風に吹かれて飛んで消えちもうたやつも、おるではねえだかな。

村人四 （素朴に）まさか、そんなことも、

村人二 あるめえたあおもうけんども、あるかしんねえ。

と話しながらもどつてくると、やぶかげから三がそつと立ち上がって前に立つ。

村人三 (低く) どっこいしょ。

村人二と四 ひえッ。(とび上がるが、三だとわかつて)

何だ、お前か……

村人三 (だまってぬつと立っている)

村人二 (立ち上がって) おそかっただな、やい。

村人四 (立ち上がって) おどかすでねえだぞ、やい。

村人三 (だまってぬつと立っている)

村人二 どうしただ、やい。

村人四 うす気味悪いだな、やい。

村人三 (低く) どっこいしょ。

村人四 お、おかしな声出すなって。

村人二 あたまへ参っただか……お前。

村人三 (突然) ばかぬかせ、やい、手前ら約定わすれた
だか？

村人二と四 約定？

村人三 じいさまがいうたでねえだか、わかれたあとで寄り合うときは、合言葉いわねばなんねえだぞ、どっこい

しよちゆうたらやっごらしよと答えれちゆうて。

村人二 ああ！ んでもお前、

村人四 そら旅にぶっ立ってからのこんだと、

村人三 もう立っとるだよ、おらたち。ながの住み馴れた
家を出るとき、旅に立っとるだわ。さ、いうてみれ。

(低く) どっこいしよ……

村人二 んでも、もうこんげに会うてしもうたもんなら、

村人四 今夜のとはどうぞごかんべんを、

村人三 やい、掟の一はなんちゆうだ？

村人二と四 ……きつと掟は守らねばなんねえ。

村人三 よし。(低く) どっこいしよ。

村人二 (四と顔見合わせて、何となく) えへへ。

村人三 やい、いわねえだか？

村人二と四 いうだいうだ、いうだがな。

村人四 その、まことに相すまねえだが、もういっぺんき
つかけを、

村人三 (うなずいて低く) どっこいしよ。

村人二と四 (おなじく) やっごらしよ。

村人三 二郎太に四郎兵衛だな？

村人二と四 んだ。

村人三 よし。やいじいさま、二郎太と四郎兵衛が来た
ぞ。

じいさま よしよし。(とやぶかげから出て来て) やい、

みんな出て来い。

他の村人 おう。

一同、もそもそと出て来る。

村人二と四 お、お前たち——来とっただか？

村人三 あたり前だわ。お前らの来よつたも、ちゃんとわかつたがな。

村人一 わからねえわけがねえだわ、鼻の穴ア夜空に向け
てどたどたとやって来るなり、ふでエ声でおめきよるで
な。

村人七 よろず何事もはじめが肝心。ここはいっちょ思い
しらせてくれようちゆうじいさまのな、

村人六 (もう涙声で) あったけえ心だわ。

じいさま まあ、ええだわええだわ。んでは、揃ったとこ
ろでさつそく出かけるとすべえ、といいてえところだが
(二と四に) やい、何を持つとるだ？ お前たち。

村人二 これか？ こらあお前、鋤だで。

村人四 鎌だで。これを磨き立てとつたで、おら……

村人二 おら、えものにややつば、長えがええとおもう
て、

じいさま 問ぬけ、おらたち、日やといの流れ百姓だちゆ
うて旅をするだぞ。そんげなもんはお前、

村人二 百姓だで、鋤ならええでねえか？

村人四 んだ、鎌なら、

じいさま だでよ、だで、その、つまり……そんげに、これみよがしに持つもんでねえだわ。

村人一 んだ、そんではお前、百姓でねえみてえだわ。

村人三 さあお前にやこの鍋、お前にやこつちの釜。

などと二と四に、それぞれ鍋釜などをかつがせる。

じいさま よしよし。まず役人どももまだ村にやもどつて

来よらんだったし、危ねえこともなく出かけることが出

来るちゆうは、なんともさいさま幸先のええこつた。めでてえな。

一同 んだ、めでてえ。

村人三 やい待て、じいさま。

じいさま 何だ？

村人三 五郎次がおらねえだぞ。

じいさま なに？ いや、さっきたしかにすがたを見ただがな。

村人三 でも、おらねえだわ。

村人五 (樹の上から) ここにおるだわ。

皆びっくりする。

村人一 やい、手前、また、何でそんなところに。

村人三 何をしとるだ、いってえ。

村人五 村を見とる。

村人一 もしや役人が来はしねえか、とか？

村人五 んではねえ、ただ……村を見とる。

一同 (なんとなく村の方を見る)

村人六 (突然、すすり上げる) おらたちの村……

村人三 やい、門出に涙は、

村人一 ええだわ、人それぞれ好みちゆうもんがあるで。

間――

じいさま 住み馴れた村アあとにして、これから先ア山越

え谷越えの長丁場だ。朝のあけから日の暮れまで歩みつ

づけて、ねむるときにやあまず、このひろびろとした空

がかけぶとんで――

村人二 こらまたどえれエかけぶとんだな。

村人四 ぜんでえ何人がけだ？

一同 (笑う)

じいさま そんなで、しきぶとんはこの地面よ。

村人一 こらまたかてえしきぶとんだ。

村人三 じょうぶこの上なしだわ。

一同 (笑う)

じいさま んでは、そろそろどぶっ立つべえ。

一同 おう！ (と歩き出しかけるが)

村人一 やい待てじいさま。

じいさま 何だ？

村人一 その……どっちへ向って出かけるだか？

じいさま そらおめえ……どこにいるやらわからねえ袴垂

れさまをさがそうちゆうだから、どこへ行くことになる

だか、わからねえだわ。けれど、まずはぶっ立って、

村人二 んだ、まず手ぢかな性悪しょうわる長者をおそやええだ。

村人三 まぬけ、長者ちゆうたら性悪にきまつとるだわ。

村人六 その、門出に喧嘩いさかいは禁物。

一同 (笑う)

じいさま んでは、皆の衆。

一同 おう！

一同、歩き出す。

つぎの場への転換は、できれば一同が舞台を歩いているうちに、装置を変えたい。

音楽。

そのBへ移るあいだ、つぎの歌。

出かけて行こう

おれたち袴垂れ

袴垂れをさがす

袴垂れの党

盗みはすれど

非道は知らず

弱きをたすける

袴垂れの党

その B

長者館が立っている。

時は「春」を示したい。

一同、やってくる。

寄り集まって相談する。

たちまちばらばらとわかれて長者館の周囲に潜入する。

たちまちまた集まってくる。

すぐななにやらしめしあわせて、二手か三手にわか
れ、本隊は長者館の扉に人間梯子をつくってする
すると乗りこむ。

以上サイレントでなるべくコマオトシの感じ。

やがて屋形がポーツと燃え出す。さわぎになる。

走り出て来た一同、かけまわりながらそれぞれ口
口に、

村人一 やあい、袴垂れが来たぞ！

村人二 義賊袴垂れがやって来たぞ！

村人四 袴垂れの党のお出ましたぞ！

村人三 長者館の宝ものはごっそり失せてしもうただぞ！

村人五 村の衆に金をかけるちゅうだぞ！

村人七 あすの朝にや一軒一軒に金が入つとるだぞ！

村人六 袴垂れがとうとう来たぞ！

じいさま 身の丈六尺ばかりのたくましい武者たちが馬に

乗って疾風^{はやて}みてえにさあつと来てひゅうつと行っただぞ！

村人四 (じいさまをつかまえて) や、やいじいさま、そ

らほんまか、ほんまの袴垂れが出ただか？

村人七 こらえれエ早かっただな！

村人六 ありがてエありがてエ。

じいさま ば、ばか、こらおらたちのこつたわ。ちよつくらその、ほんものみてえなふうに、いうただけだわ。

村人二 (走って来て) 役人が出て来たぞじいさま！

村人一 それ、逃げれ！

じいさま いいや、んではねえ、おむけえするだおむけえするだ。

村人三 なんだ、なんちゆうただ、じいさま！

じいさま ええだか、おらのいうたとおりにまねるだぞ。

まずこういうだ、これはこれはお役人さま。

一同 これはこれはお役人さま。

じいさま いま鬼みてえな強そうな盗賊どもがおおよそ五

百人。

一同 (たどたどしくくり返す)

じいさま あっちのほうへ行っちまいしました。

一同 あっちのほうへ行っちまいしました。

じいさま これをてんでくりかえすだ、役人を見たら走

りよってな。

村人一、二、三、五 よし、わかつただ。

村人四、六、七 (一、二、三、五と同時に) これをてん

でくりかえすだ——

村人一、二、三 (四、六、七に) とろすけ！

村人五 もうそこへ来ただぞ役人が——

じいさま よし、散れ！ あつまるところは裏山の三本

杉！

一同 おう！

さつと散ってゆく。

屋形がもえてくずれる。

そのC

道。

「秋」を示したい。

一同、ポクポクとやってくる。

じいさま どうだな、ここでひと休みと行くか。

一同 おう。(と坐る)

村人一 まず、ゆんべの村では、ひでえもんだっただな。

村人三 うまく行っただ、まったく。

村人一 うまくは行ったけれども、ひでえもんだっただ。

村人四 んだ、村の衆に金をわけとつたら、いきなり、こ
ら袴垂れさまのおめぐみだか？ と聞いて来ただ。

村人二 それはいつものこつたでおどろかねえだが、つづ
いて、んじゃあんたさんがたが袴垂れか？ と来ただ。

村人五 んだ、だでおら、いいや、とんでもねえこつた—

村人六 おらたちはにせもんの袴垂れで、と、こういうた

ら—

村人七 なに、にせもん！ ちゆうていきなりポカポカッ

と—

村人一 だであわくっておらたち、金をほうり出すなり—
散走りに逃げて来たちゆうわけだ。

一同 (笑う)

村人三 んでも、仕事としては、うまくいっただ、やっぱ。

一同 (笑う)

村人五 (一方を見て) や、おい、じいさま!

じいさま (のんびり) ほう、いまごろ追手が来ただな。

村人二 前の村はもそつと早かっただな。

村人四 前の前の村はもつとおそかったぞ。

村人一 まあ、ならしてみりやあ、これが普通の頃合いか
げんではねえかな。

ピンと髭を立てた役人が馬に乗って家来をつれて
——といっても、人間が三人騎馬戦の馬を組んで、前の一人が馬の首をかぶり、あとの二人は下人らしくえぼしをかぶって、その上に役人が堂々と乗る、という工夫で——やってくる。下人は顔に黒布をたらしめてもよい。この「馬」はなるべくしよつちゅう動いていること。

役人 (パカパカと通りすぎかけて、もどつて来て) やい
こら、百姓めら。

一同 へえい。

役人 ちとききたいことがある。

一同 へいへい。

役人 どうで訊いてもわかりはすまいが。

一同 いえ、そうおっしゃらねえで。

役人 とにかく訊くゆえありがたくおもえ。

一同 へい。

役人 これもひとえに御慈悲であるぞ。

一同 どうもありがとうございます。

役人 きりきりはつきり返答をいたせ。

一同 へい。

役人 もし万一かくし立てにおよばば、

村人四 (面倒くさくなって) あっちへ行きましたで袴垂

れなら。

役人 なに、あっち？ それ！

パカパツパカパツと行きかけて、すぐ馬首をめぐ
らせてもどつてくる。

役人 やいこら、無礼もの。

村人四 へ？

役人 まだ訊いてはおらんではないか何も。

村人四 へえ。けんど、

村人一 (制して) こらどうも、まことにご無礼を。

役人 ええ天をおそれぬ大罪人、前へ出い。

村人四 へい。

役人 (馬をあおって四の廻りをまわって、ムチで叩いて
みたりして) 合格。

村人四 へ？

役人 道案内をもうしつける。荷をかついでついて参れ。

村人四 へ？ んでも……

じいさま (ブロック・サインをおくる)

村人四 (了解して役人に) へえへえ、そらどうもおあり
がてえこつて。

役人 おめぐみであるぞ。

村人四 へい。

役人 それ！

役人と馬、下人、行く。村人四もつづく。

一同、のんびりと見おくつて

村人三 大丈夫だかな、あのとんま。

村人一 ま、案ずることあるめえ。

村人三 けんど野郎、こないだもじいさまの合図見ちがえ
ただぞ。

村人七 んだ、ちよつくら待てちゆう合図を、それ飛んで
出るちゆう合図と、

村人二 そんなで野郎だけすつとんで出たで、役人どもあわ

てて、

村人七 おらもあわててやつとばかりにつなをひいたで、その、役人どもがひっかかってどっところんだは、こら、おらたちのつむりのとおりだったが、野郎もいっしよにひっかかってすっころんだは、こらつむりにねえこんだったで。

一同 (笑う)

村人三 (苦い顔で) おっぼってさつと逃げるちゆうわけにも行かず、どえれえ気苦労使うただわ。

村人一 ま、とんどのつまりは事もなかったで、あまり責めることもあるめえ。

村人三 (ムキになって) いや、んではねえ、合図の見ちがえちゆうはこら、掟破りにおとるともまさらねえ——

村人六 (心配して) そんげに、いい立てるでねえつて。

村人三 (六に) やい手前、手前がいつでも眼エしよぼつかして情エかけるだで——

村人一 (三に) んでもお前、責めたてたつても野郎の早がつてんがおそがつてんになるわけでも、

村人二 いや、こんだきつと、おそすぎになるだな。

村人三 だで、おそすぎも早すぎもいけねえと、おら——
村人一 (三に) ついでにいうがな、お前おとるともまさ

らねえちゆうたが、あらまさるともおとらねえちゆうも
んで——

村人六 (泣く) おら、みんなのためをおもって——

じいさま (なにかひとりりで、しきりに手を動かしていたが) うん、これだで! (一同びっくりする)

村人一 何だな、じいさま。

じいさま おらにも責任がな、こないだ野郎が見ちがえたについちゃ、やっぱ、あるではねえかとおもっただよ。つまり、その、ちつと凝りすぎただな、合図を。「それ行け」ツちゆうようにみえる合図が実のところは「もどれ」ちゆう合図で——ツちゆうところまでだと裏を読まれちやなんねえからその逆をついて——ツちゆうて、かんげえすぎになっただな、つまり。やっぱこら、あっさりど、(鼻をかいて) こうしたら「行け」で、(耳をかいて) これは「待て」。ええか? これからこれで行くぞ。

一同 (鼻をこすって) 行け! だな?

じいさま んだ。

一同 (耳をかいて) 待て、だな?

じいさま んだ、それから(胸にさわって) これは「散れ」で……

一同 ふんふんとうなずいて聞いているが、この話のうちに役人が最前のすがたで、つまり馬と下人二人のつくる「馬」に乗って、出て来ている。馬

が前足で鼻こすりのまねなどすることに注意。

役人 やいこら。

一同 (おどろいて) へいへい。

役人 やいじじい、そのまねは何のまねだ。

じいさま へ？ と、申しますと？

役人 鼻をなでたり耳をかいたり、あらあやしげなる振舞いかな。

じいさま いえいえこらちつともあやしげではござりませぬ。じゅうぶんにはつきりしておりますがな。その、それについてはその、いうにいえねえ——

役人 なに？

じいさま お役人さま、あつちにやっぱ袴垂れはおりましてござえますか？

村人一 はや退治してもどつて参られたでござえますな？
さすがはご立派なお役人さま！

村人三 やっぱお髭のお力で！

村人二 ひとにらみに、にらみころして——

役人 やい、うるさいわ、袴垂れなんぞはどこにもおりはしなかつたぞ。道案内にやとうた下郎に小半刻も引きまわされて、見たような道へ出たとおもうたら、ここだつたわ。

じいさま へえ！ そんじやまあ、半分ほどはあたつとる

ちゅうもんで。

役人 なんと申した？

じいさま お役人さま、その、道案内の男はどこに？

役人 なに？ やや、いつのまにやら消えてしもうた！

一同 （小声でたがいに）どうしたただかな、野郎。

役人 ううむ、これはますます面妖。やいじい、汝ら定めてただの百姓ではあるまい。さきほどのあやしげな手つき身ぶりといい、唐天竺渡りの邪法を行なう奇ッ怪な輩。さあきりきり白状せい！

このあたり、役人の「馬」はしきりに動きまわる。

じいさま と、とんでもござえません。おらたちは村を捨

てた流れものの百姓——こらほんまのことで、まった

く！

役人 いいや聞かぬ、さっきのまじないは何のまじないだ？

じいさま そこはそれ、

役人 いうにいえねえとぬかしよったな、いえねえのを、

いやいや、いえぬことをばいわせて見せるが役人の器量だ。やい、こう、鼻をこすったな？

思わず六がとび出そうとするのを、みながおさえ

て、

村人一 ば、ばか、あら向うの——じいさまがやったとき
だけだ、合図は！

役人 (気づかず) こう、耳をなでたな？ 何だこれは？
この意味するところのものは？ (しきりに「馬」が落
ちつかない)

じいさま へえ、その意味ちゆうは——

役人 意味は？

じいさま つまり、おらがこう鼻を——

と、じいさまが合図の鼻こすりをやりかけるとそ
のとき「馬」がどつとあばれだし、役人はドスン
と落っこちて、

役人 ううむ……(眼をまわす)

じいさま ありや。片づいてしもうただな。

村人四 (声) んだな。

村人三 あ！ 野郎の声だ！

村人一 おい、どこにいるだ！

村人四 ここだで。

と馬が「馬の首」をぬぐと、村人四。

村人四 (大声に) やあい！ 正義の味方袴垂れが出ただぞう！

とごきげんに見得を切る。

一同うんざり。

村人一 やい手前、合図の鼻こすりはいま変ったところだに、よく――

村人四 そら、見とったでな、おら、馬のなかで。

村人三 ふん、けんど、こんだ感心に見ちげえなかつただな。

村人四 そら、お前、いまのいまのこったで、なんぼおらでも。

一同 (笑う)

平伏していた下人二人が、このとき顔をおおって
いた黒布をあげて、

下人一 あの、おらたち、本来このへんの村のもんだが、

下人二 いっちよ、仲間に入れちゃくれねえだか？ あん

たさんたちの――その、つまり――

下人二人 袴垂れの党に。

一同、顔見合わせる。

村人四 道々、おらがこっそり話しただよ。にせもんでもええで、いれてくれちゅうとるだわ。

村人三 そらいけねえだわ、やっぱ。

村人一 これまでも、ずいぶんと、そんげなふうにしたのま
れただがな。けんどおらたちはそんげなとき、

村人二 いつも、こんげに答えるだよ、袴垂れがええとお
もうたなら、いっちよ、自分たちで袴垂れをおやんなせ
え、ちゅうてな。

村人七 そんなで、ほんまの袴垂れをさがしなせえ、ちゅう
てな。そんなで、もしもさがしあてたなら――

村人六 きつと、おらたちにも、なんとかして知らせてく
だせえ、ちゅうてな。

村人一 名をかたるちゅうは悪いことかもしれねえけんど
な、にせもんの数がどんどんとふえりや、どっかに身を
かくしとるほんものも、きつと出てくるべえし、

じいさま んだ、そんげなわけだ。そうしてにせの袴垂れ
のどれか一つがほんもので行き会やあ、口から口へと知
らせ合うて、やがては、ぜんぶのにせがほんものとな
がるだ。そのとき、にせもんは、にせもんじゃなくなる
だよ……ほんまの袴垂れの党が、どえれエどえれエかた

ちで出来上がるだよ。

一同 んだ、そんげなわけだ。

下人二人、うなずいて聞いていたが、

下人二人 ——んでも、おらたち、たった二人だで——

村人五 (ボソリと) 一人でもやれるだね。きつと。

皆、五を見る。

村人五 (ボソボソと) やりにくいだよ、きつと。出来ね

えかもしねえだね。おらじゃ、駄目だったかもしんね

え。……けんど、二人なら、やりにくさはちつとは減る

だな。きつと。

村人一 仲間をふやすだ。な？

村人二 ふえるだよ、きつと。

村人三 んだ、そりやたしかだ。な？

一同 んだ、たしかだ。

下人二人、うなずく。

村人四 んじゃ……ここで別れるとすべえ。

下人二人 (立ち上がって、深く深く礼をする)

一同 (これも、同様深く深く札をする)

暗転。

四 お前をたすけたのは袴垂れだ

雪が降っていたい。

山のなか。夜。

声がきこえる。

「どーッこいしよ……」

それにこだまのように答えて、

「やーッこらしよ……」

これがしずかな雪山に、いくつも呼びかわされて
しだいにちかづき、場面があかるくなる。

村人七、獵師すがた、しゃがみこんで雪の表面を
掃きながらあとずさり登場。人かげにぱつと身
を伏せる。

村人一 (出て) どーッこいしよ。

村人七 やーッこらしよ。

村人一 七兵衛だな？

村人七 んだ。

村人一 無事だったか？

村人七 かすり傷もねえ。

村人一 まずよかった。じいさま、七兵衛がもどったぞ。

じいさま (出て来て) うむ。——皆、出て来るだ。

一同 おう。

二をのぞいた全員が顔を揃える。

村人三 (七に) やい。足あとは消して来たただか？

村人七 ぬかりはねえで。

じいさま 揃っただかな、これで。

村人一 二郎太がまだだ。けんど、やつのかつたで、案ずることはねえ。おっつけもどるだ。

じいさま む。……今日もうまく行っただな。

一同 おう。(ゲラゲラ)

村人四 おらたちの名も、だいぶん高うなっただな。

村人七 どこへ行っても、袴垂れの噂よ。なあ？

一同 んだ。まったくだ。(ゲラゲラ)

村人五 けんど……(一同、五をみる) そら、おらたちの

噂で……ほんまの袴垂れの噂じゃねえだ。

しんとなる。

村人一 んだ。もしやほんまの——ちゆうて噂の出どこを
たずねてみると、いつもおらたちのことだ。

村人三 いちどはでつきりこれこそちゆうてたずねてみる
と、いつか出合った村の衆たちのやつとる袴垂れだった
だ。

村人七 あら、おらたちにせもんをまねとるで、にせもん
のにせもんだな。

村人四 いや、そら、おらたちがほんものをまねとるだか
ら、やつぱ、やつらはほんものにせもんよ。

村人七 何だ？

村人四 とろすけ、ええだか？ おらたちただのにせもん
じゃねえだぞ、ほんものをしんくまんくまねとるにせも
んだぞ？ なら、そのおらたちをまねとるにせもんは、
つづまるところ——

じいさま とにかく、どこに行っても、ほんものに会うた
ちゆう話はきかねえだな、一向に。

しんとなる。

村人七 もしや……

一同 (七を見る)

村人七 い、いや、何、何でもねえだ。

村人三 もしや、何だ？

村人一 お前、もしや、ほんものは、とうの昔に役人につ
らまえられてしもうたではねえかと、案じよるではねえ
か？

村人三 ほんまの袴垂れともあろうものが、つらまるなん
ぞありようはずがねえわ。

村人四 んだ、役人なんぞにや——

村人六 おらたちでもつかまらねえに。

一同 (笑う)

しんとなる。

村人六 (急に) もしや……

一同 (六をみて) 何だ？

村人六 (小さくなって) 何でもねえだよ。

村人四 (仁王立ちになって) やい。手前、もしや袴垂れ
さまがおッ死ちんだではねえかと案じよるだな！

村人六 ち、ちがうだ、そんげな——

村人四 いいやそうにちげえねえ、ふてエ野郎だ、ええだ
か、ほんまの袴垂れさまともあろう無双のつわもんが、
そんげにたやすくおッ死ちんでたまるもんだか！

一同 んだ、そのとおりだ。

村人六 (泣き出して) お、おら、そんげなことおもうち
やおらねえだよ……

しんとなる。雪が降る。

一同 (同時に) もし、ほんまの袴垂れが――

顔を見合わせて、だまる。

じいさま もし、ほんまの袴垂れさまが、この世にやもう
おらねえとしたら、おらたちにせもんの袴垂れは、ぜん
てえどうしたらええもんだ、ちゅうだべ?……(力づよ
く) けど、そんげなことはねえだ。袴垂れさまはきつ
とどこかにご壮健でおらっしやるだ。

一同 (力づよく) んだ。そうにちげえねえだ。

じいさま とにもかくにもたしかなことは、ほんものさま
のどこにやおらたちのうわさが、まだ聞えてねえようだ
ちゅうこった。

村人一 んだ。やっぱ、まだおらたちの力が足りねえだ
わ。

村人四 もつと名高くならにやならねえだ。

村人三 噂を拡げにやならねえだ。

じいさま んだ、この上ともつとめようで。

一同 おう!

村人一 しっ!

村人三 なんだ？

村人一 ほれ……

「どーッこいしよ！」の声。

村人三 二郎太だな？

村人四 ……やーッこらしよ！

肩に何やら人を背負った村人二、登場。

村人四 二郎太か？

村人二 (荒い息で) んだ！

村人四 おそかっただな……や、何だ？

村人一 や、おなご女子だ！

一同 (総立ち) なに、おなご！

村人三 やい、やい手前、ようもようも掟を破って、ええ

もう。

村人六 お前、てえ変なことを……

村人二 ば、ばかぬかせ、おなごではねえ。よく見れ、こ

どもだ、こどもだで！

一同、横たえられた子どもを見る。

村人一 ふむ、おなごの、子どもだな。

村人七 気を失うとるだか？

村人二 いや、眠つとるだ。おらの背中、いつのまにやらねむりこんでしもうただ。

村人六 なんちゆう、はや、かわいいもんだ……

しんとなる。

村人三 (二に) やい。やつぱ捷を破つただわ、手前。金

銀たからは盗んでも人はぬすまぬちゆうが袴垂れの――

村人二 わかつとるだわ。けんど、こら人じゃねえだわ。

人たいえねえだわ。

村人三 なに？ こら妙なことを聞くもんだ、子どもが人

じゃねえちゆうは……

村人二 ンではねえ、その、おらのいうとるのは……こ

ら、売り買いされたもんだで……その、

じいさま なに？ ……ふむ、するつちゆうとこの子は、

あの長者の家に、

村人二 んだ、おら長者の下人の衆と仲ようになって館に入

りこんどるうち、すっかりとわかっただ。あの長者は近

くの里から人を買うて遠くの里に人を売つとる。その一

人が、

じいさま この子だな。

村人二 んだ。おらに相談かけた下人の衆のいうには——
なんせ、ちかごろじゃおらたちがこつそりと耳に、袴垂
れの党のもんじゃ、ちゆうてささやけば——

村人六 んだ、どの村の衆も、たちまち悩み苦しみを打ち
あけてくれるで——

村人七 んだ、そればかりじゃねえ、長者屋形のどこに金
蔵があるかどこが手うすかまで——

村人四 そつくりと教えてくれるで、こつちの仕事の張り
切りようがねえくらいだ。

一同 んだ。

村人二 んで、そのおらに相談かけた衆のいうには、こ
の、だれひとり身寄りのねえみなしごが、あんまりあわ
れだで、ひとつ袴垂れさまのおちからで——

じいさま ふうむ。

しんとなる。

村人二 だで、だでよ、おら、かんげえただわ。どんげな
わけがあつてもおらたち袴垂れは、金銀たからのほかに
や手をふれることはなんねえ。けんどこの子は、その、
売り買いされるもんだで、つまり——

村人一 けんどこ二郎太、人じゃねえ金銀たからなら、そら
残らず村の衆にわけねばなんねえだぞ。

村人二 ば、ばかぬかせ。人をわけるなんちゅうことが、出来るはずがねえだわ、品物みてえに。

村人一 ——ツちゅうと二郎太、つまり手前のかんげえるにや、この子は人だちゅうのか、それとも品物だちゅうだか——

村人二 そ、そらあ、その、

村人三 やっぱ、とにかく掟をやぶつとるだわ。

村人二 けんどお前、その……やい、なら掟をちつとばかり変えりやええだわ。

村人三 あほう、つごうしだいで変えるちゅう掟があるもんだか。ときのつごうできめるなあ約定だわ。掟ちゅうもんは、その、つごうなんちゅうもんよりは、ずっとでけえもんのために、あるだわ。

村人二 何だそらあ？ でけえもんだあどんなもんだ？

村人三 その、おらたちが……どんげなおらたちか、ツちゅう——（じいさまに救いを求めて）なあ？

じいさま ふんふん、そらまつたくそのとおりだな。そこでつまりは、こうなるではねえかと、おらおもうだがな、——このこどもは、長者の家では品物だったで長者からおらたちがとりあげるのは、こら結構なこつた。人じゃねえだからな。ところが二郎太がつれ出してしまえば、こらもう売り買いちゅうことはねえで、品物じゃねえ。つまり人だ。人になっただ。だで……

村人二 (よろこんで) んだ。その通りだ。

村人三 (首をひねって) おかしいだな、やっぱ。どっか。

村人四 や、眼をさますだぞ！

一同、しんとみつめる。

小娘(小菊)、眼覚めて、ぼんやり、まわりをみまわす。

小菊 (急におびえて二郎太にすがる) たすけて。

村人二 たすけとるだよ、もう……みんなおらの仲間だ。ちっとむさくるしいがな、やっぱおらとおんなじ袴垂れの党のもんだ。

村人四 んだ！(小菊がおびえるので) そ、そんげにこわがるなって。

じいさま (笑いながら) 案ずることはねえで、ほんまに、ちっこい娘さんや……ほんまにお前はもうたすけられただ。もうけつして遠い国に叩き売られることはねえ……やがてしつかりとした引きとりてがみつかるまでは、おらたちがきつとたしかに面倒みてやるだぞ……

(一同に) な。

一同 おう！

小菊 ……どこにいるだ？

じいさま 何だ？ だれのことだ？

小菊 ……袴垂れさまは、どこにいるだ？

間——

小菊 おらをたすけてくれたは、袴垂れさまだべ？……し

つとるだよ、おら。ばあさまが、いつも、いうとつたで

……杉みてえにせいのおかげ、それで、おなごみてえに

きれいな……おおきな馬に乗って……

一同 ……

じいさま ここにはいねえだ。

小菊 ……（いぶかしげに見る）

じいさま どこにいるやらわからねえだ。けど、おらた

ちはみんな袴垂れの党だ、その一味だ。まだ会うたこと

はねえけんどな、袴垂れさまに。どうかして会いてえも

んだと思うて、おらたち、旅をつづけとるだよ……お前

もこれからおらたちといっしよに、お前をすくうた命の

恩人の袴垂れさまをさがすだ。それで、お目にかかれた

ときにはじつくりとお札を申しあげるだ……な？

小菊 ……（いぶかしげにみつめる）

間——雪がはげしくなる。

村人一 じいさま、そろそろぶつ立つことにしねえと、こ
ら、埋れちまうだぞ、雪に。

じいさま んだな。んでは皆の衆。

一同 おう（と立上がる。二は小菊を背負う）

村人一 さて、こんだどつちへ出かけるだかね、じいさま。

じいさま どこへ行くべえ。……寒い冬だちゆうてもこれ

までは、ひるいくらかでもあつたけエうちに眠って、夜
は夜じゆう歩んで走ってちゆう行き方で来ただが……

（雪空を見あげて）こら、熊や猪みてえに、冬ごもりの
算段立てねばならねえだかな、やっぱ。

一同、歩き出す。

音楽。そして一同の歌。

旗もなければ

かしらもない

どこへ行くやら

袴垂れの党

どこまでつづく

果てしない旅

袴垂れをさがす

袴垂れの党

できれば、旅をつづけて行く一同のすがたを見せたい。

ここで幕あい。

幕間狂言

装置はたとえば写真ならぬ老松ひとつ。
なるべく客席もあかるいまま。

村人一と二がナベとオケをもって登場。上と下の
袖ちかくに座を占める。

村人一 いよーッ！（ポンとオケを叩く）

村人二 おーッ！（カンとナベを叩く）

じいさま、村人七、村人五が登場。

三人 うそがまことかうつつがゆめか

人がゆめを見るなら

おらもゆめを見ようよ（くりかえし）

じいさま 山を越え谷を渡り

村人五 野をすぎ里をすぎ

村人七 そのほかいろんなものを越えて

じいさま おらたちは旅をつづけたことでござる。(五と

七に) やいやい、まっこと難儀のおおい旅だな。

村人五、七 んだ。

じいさま これからさきも苦勞はおおかろうな。

村人五、七 んだ。

じいさま 何のための苦勞だな、こら？

村人五、七 袴垂れをさがすだ。

じいさま 何のためにさがすだ。

村人五、七 袴垂れの世を来させるだ。

じいさま どんげなもんだ、その、袴垂れの世ちゆうは。

村人七 みたこともねえしあわせが来るだ。

じいさま どんげなもんだ、みたこともねえしあわせちゆ

うは。

村人五 (不愛想に) そら、来てみにやわからねえだわ。

村人七 んだ。いまからわかっとなるなら、そら、わかっど

つたしあわせちゆうことになるだ。

村人五 夢にでもみたなら、そら、みたようなしあわせち

ゆうもんだ。

じいさま んでも、ああかこうかちゆうてかんげえたり夜

ごとの夢にみたりしねえじゃ、人ちゆうもんは、おられ

ねえもんじゃあるめえかな？

村人七 そら、まあ、人によるだな。

じいさま お前はどうかだ？ 夢をみるならその夢を人に
語るちゆうも、まんざら人のためにならねえもんでもあ
るめえが。

村人七 てへへ。そうかな。

じいさま まず、語って見せれ。

村人五 語って見せれ。

村人七 んじゃまず、おらのはこうだ。ええだか。

じいさまと五は、常座に治まる（心）。

音楽（鼓の心にて桶、鍋など叩く）。

村人七 まず、こう眠れば（と立ち眠りのかたち）きつと

こうだ……（以下、無対象にて）やや！ くら、うまそ

うなまんじゆう（と、むさぼり食うかたち）やや！ こ

らうまそうなさかな（とむさぼって）やや！ くら仰山

な酒（とあおり飲んで）やや！ くらうまそうな……

じいさま （うんざりして）それだけだが。

村人七 んではねえ、まだまだおわらねえだぞ……やや！

くらうまそうな……

じいさま ほかにや見ねえだか、何も。

村人七 金をみるだわ。

じいさま 金？ ふん。

村人七 てへへ、この仰山な金で、まず何を買うべえ。う

む！ あのうまそうな――

じいさま ほかにや見ねえだかい。女子おなごは？

村人七 （ハタと手を打って）女子おなごがいたりや、うめえものをこさえてくれるだな。うん、こんだ見るとすべえ。

じいさま まずお前のしあわせちゅうは、てえしたしあわせとも思えねえだな。よし、こんだおらの番だ。

村人五、七 やんややんや。

じいさま （うたう）にんげんよろず色と欲……

村人七 なんだ、おらとてえした変わりは、

じいさま うるせえ、こらきつかけちゅうもんだわ。

三人 人間よろず色と欲

人が夢を見るなら

おらも夢をみようよ

じいさま、眠りの型になって、

じいさま まず、こう眠れば、日ごろああもせん、こうもすべえちゅう念じごとの、きつとつぎつぎとあらわれてこぎざる。いとまたやすいことこぎざる。さあ眠った。やいやいおらの夜ごとの夢のものども、あるかやい、出て来い。

女たちの声 はああ。

じいさま おるかおるか。

私たちの声 はああ。

美女三人、登場。

じいさま おったただか。

美女三人 お前に。

じいさま 念のう早かった。まず おもて面を見せれ。

美女三人 (はじらう身ぶり)

じいさま うっふふ。遠慮にはおよばねえ。

美女三人 (はじらう身ぶり)

じいさま やい見せれ、見せねえだかやい。

美女三人、面を見せる、と老婆の面。じいさまび

つくり。

じいさま やああ。(逃げようとする)

美女一 やい逃ぐるか。

美女二 だいたいお前がおらたちにどうかして会いてえち
ゆうて、

美女三 念じ出したでねえだかよ、おらたちを。

美女三人 ああ！ おなこ女、おなこ女、おなこ女——ちゆうて。

じいさま そ、それでも、そんげなしわしわな、

美女三人 こいつがこいつが。やい。手前はどうかだちゆう

だ？

じいさま そ、そんなでも、こ、こら夢だに。せめて、へ

え、夢なりと。

美女三人 夢だけだぞ。

じいさま へえ。

美女三人 んでは、

と、くるりまわって、若い美女の面になる。

じいさま やあやあ。

と、ちかづくとかわされてそのまますーっと空を
切ってもろにころぶ。見ている村人七、大喜び。

じいさま ええもう、この曲り腰め。やい、しゃんとなら
ねえだか、夢のあいだぐれえ……や、なったぞ、なった
ぞ。

美女三人とじいさまの舞。とど、アクロバット風
にきまった形で見得となる。

村人七 なんぼ夢でもああは行くめえ。

さて、美女とじいさまの方は、

美女たち のうのう、じいさま。

じいさま 何だ、何だな？

美女一 なんぼ夢でも、

じいさま ふむ。

美女二 三人は太^{ふて}エわ。

じいさま そらまたなぜだな。

美女三 ええだか、この袴垂れの世も、おなごとおとこの

数は、

じいさま ふむ、そら、やつばおなじかな。するとおらが

三人だと、二人あぶれる男が出るだな。こらいけねえ。

うん、ならひとりとすべえ。

美女三人 (艶然と) どのひとりにするだね？

じいさま (考慮して) 高えの、まるいの、ちっこいの、

と……

それぞれの舞。

じいさま む、きめただ！

美女三人 きめたかきめたか。

じいさま 一定、きめてござる。

美女三人 して、どんげにきめただ。

じいさま こんげにきめた。

と高いの（たとえば）を指すと、他の二人が、

美女二人 おのれはおのれは、えい。

じいさま、一回転してのびる。

美女二人 腹立ちや腹立ちや、腹立ちや腹立ちやの……
（と退場）

のこった美女一、介抱する。

じいさま （よろこんで）とにもかくにもお前とおらが、

美女一 こんげに夫婦になったるうえは、（と面をはずし
てポイと捨てる）

じいさま （素顔を見て）たはッ。

美女一 ええも、男ちゆうは、えい。

じいさま、また一回転してのびる。村人七、おおいに喜ぶ。

美女一 腹立ちや腹立ちや……（と退場）

じいさま (腰をさすって) むずかしいもんだ、しあわせ
ちゅうもんは……おなごのこんだけでも、こんげにうま
く行かねえだからな。うむ。まだまだ苦勞が足りねえだ
わ。

村人七 (五に) やい、お前の番だぞ。

じいさま やい、どうした。

五、ほんとに眠ってる。

じいさま やい、起きろ。起きて夢の話をしねえだか、や
い！

五、身を起こして立ち上がる。しかし、依然とし
て眠っている感じ。するすると正面に進み出る。

村人五 やい、地頭ども、出て来い。役人ども、出て来
い。

村人七 寝ぼけただな？

じいさま ほっとけって。

村人五 長老ども、出て来い。おらをいたぶったやつども、
も、出て来い。おらをいたぶったやつにへえこらしたや
つども、出て来い。いたぶられとるおらを、見て見ねえ
ふりしたやつども、出て来い。おらの肩ア叩いて、ま

辛抱がかんじん”だとか”ながえもんには巻かれるちゅうだ”なんぞとなくさめ面づらにいうたやつども、出て来い。
”気持はわかるけんども、無茶をしちやいけねえで”とぬかしよったやつども、のこらず出て来い。やい、袴垂れの世が来ただぞ、おらたちの世がきただぞ。こうなつたら覚悟しやがれ。さあ出て来い。出て来い！

何人かの声 はああ。

牛や馬、ほかけものたちが、えぼしをかむつたりそのほか、つまり長者や役人たちが牛馬に変身した心で、出て来る。

牛や馬 お前に。

村人五 おせえおせえ。まいちどやり直せ。やい。(蹴

る)

牛や馬 お前に。

村人五 まつとていねいにいえ。やい。(なぐる)

牛や馬 お前に。

村人五 まだ足りねえだわ。やい、やいやいやい。(狂暴になぐりちらす)

村人七とじいさま、五を制しようと、

村人七 そ、そんなお前――

じいさま そ、それをやり出したら、お前、とどまるところがねえだぞ！

村人五 ええ、はなせ、はなすだ！

二人、すつとぶ。

じいさま おい、こらえるだ！

村人七 気持はわかるけども――

二人 無茶するでねえって（といいかけて、気づき、口をおさえる）。

牛や馬 おなさけを、おなさけを。

村人五 なに？ よし、やい、おらたちが手前たちにそんなげにいうたとき、手前たちがかけてくれたおなさけをかけてやるだわ、三層倍にも七層倍にもかけてやるだわ！

狂暴に荒れまわり、くるくるまわって倒れる。牛

馬はその前に退場。

五、やがて、ゆっくりと身を起こす。

じいさま

村人七 目がさめたか？

村人五 ……ああ、おらの番か。んだな、おらの夢は、ま
ずこうだ。こんげな夢だ。やあい、みんな出て来い、袴

垂れの世がやって来たただぞオツ！

はなやかな囃子とともに、村人たちの男女多勢が
出て来て、陽気に舞う。

五、その中心でにこにここと舞う。

歌

叶たかのたよ

おもたこと かのた

末は松山

五葉の松

囃子

どーッこいしよッ

やーッこらしよッ

群舞のうちに、間狂言がおわる。

五 コイツ胡散くさい奴だ

その A

数年のち。

山奥の谷川。春が近い冬。

十六歳ほどに成長した小菊が、髪をすくなど適当

なしぐさをしながら歌っている。

小菊　ぴよんと出た

兎に聞こうか

ケンと啼いた

雉子に聞こうか

おらが殿御は

どこの里

かあと啼く鳥に

聞こうか

ぴいひよろろ

とんびに聞こうか

おらが殿御は

どこの空

いつの間にか、舞台の高みに、ひげ面に蓬髪、腰に大刀を帯したたくましい男が登場して、じつと小菊をみている。年のころは三十五、六か、あるいはもっと若いのかもわからない。

男　娘。

小菊　（気づくが、怖れるということを知らず、まじまじ

と見返す)

男 よい器量だな。家は、ここらか。

小菊 (首を振る)

男 どこだ。

小菊 (笑って) 知らねえで、おら。

男 (苦笑) あやしくみえるようだな、おれが、どうも。

……では、お前の方はあやしくないということになるよ
うだな。(どつかと腰を下ろす) しかし、よいところだ
な、ここは。けわしい山のふところ深く、木の根石くれ
をふみしめて 柚道せまをたどつてくると、やがて道が消え
る。消えるところから、しかしおれはかすかな手がかり
を見出したよ。たくみにおおいかくしてはあるが、たし
かにけものではない人の通ったあとがあった。おれのよ
うなもの目のほかには、とてもとまらぬあいまいな道
だ……やがて、いきなりここへ出た。日が照っている。
水もある。どうやら畑もある。しかし家がない。人のす
がたもない。うたごえが聞こえた。ふっふ、その声の主
をおれは、もののけか狐狸のたぐいか、と、しばらく阿
呆のように見つめていたというわけだ……

小菊 お役人かね。

男 そう見えるか。

小菊 …… (首を振る)

男 親はどこだ。

小菊 (烈しく首をふる)

男 しかし、まさか、おぬしひとりで、ここに。

小菊 仲間がいるで。

男 仲間。ほう、どういう仲間だ。

小菊 ……おどろくでよ、聞いたら。

男 おどろきたいな。しみじみとおどろいてみたいよ、おれは。ながらくそうおもって来たものだ。おれはまだ、若い。若いといえるだろう。なのに、なぜ、こうだ？ おれのせいさ、といえると同時に、そうばかりでもあるめえという気がしてくる。若いせいだろうな、実は、これが。…しかし、今日こそ、何か変わったことに出会えそうさ。うつくしいな、お前は。どうやら、あまり長い間、おれはたったひとりですぎたようだ。もっと早くに歩き出すのだった。歩んでまわる習慣ならわしをとりもどすのだった。

小菊 (また、最前の歌をくちずさんでいた) ……おらたち
ちはね……袴垂れの党。

男 なに？ 袴垂れ？

小菊 (喜んで) ほら、おどろいた！

男、一飛びして、ぐっと小菊をつかむ。

小菊 あ！

男 女のおいだ……おれをたぶらかそうという化生けしょうのも
のではないな……やい、何というた！

小菊 は、はなせ！

何やらつぶでらしきものが飛んで、男に当り、小
菊はとびはなれる。そのとき、つぶてのとんで来
たと逆の方向から、村人二がかけて来て、

村人二 小菊、どうした！

小菊 二郎太！（かけていって、そのうしろにかくれる）

村人二 何もんだね、お前さまは。

男 おぬし、身寄りか、この娘の。

村人二 いや。

男 いろいろおとこか。

村人二 ば、ばかぬかせ！

男 おこるな……娘、無礼は許せ、もしやばけものかとお
もうてな。(二二に) おぬし、この娘のいう、仲間の一人
だな。

村人二 どっちから来ただ、手前。

男 おぬし、袴垂れの党だと？

間――

村人二 だったら、どうするだね。

男 会いたいな、袴垂れに。おるなら案内してくれ。

村人二 (小菊と顔を見合わせる) ……知ってなさる、ちゆうだか? 袴垂れさまを。

男 知らんこともない。いや、よう知つとる。この上なくちかしい仲だった、といえよう。

小菊 ほんまの、袴垂れさまを、だか? それとも、

男 何をいう。袴垂れは一人だ。

村人二 そうはいかねえ、ちかごろじゃにせもんの数もずいふんとふえたで。

男 そのようだな。と、いうことをおれは、こんにちただいま知つたよ。なるほど世の中にはさまざまなことが起こっているものだ、おれの知らぬ間に。……さて、ともかくぬしたちの首領に会わせる。

村人二 その、あんたさんのよう知つとるちゆう袴垂れさまは、たしかにほんまの……

男 いまは昔。都では誰知らぬものもなかった。両三度、とらえられたが、こともなげに牢を破つた。沓として消息を絶つて、はや、何年になるか……ふふ、その後のやつのこと、だれも知るまい、知るはずがない、このおれのほかには。

村人二 (小菊と顔を見合わせる) どうやら、こら……

小菊 んだ!

村人二 とうとう、手がかりが見つかったらしいだな……

正真正銘ほんまの袴垂れさまの！

パイと指笛、すると、樹の上に、村人五があらわれる。

村人二 聞いたただか。

村人五 聞いたとつただ。

村人二 (合図する)

村人五 (奇妙な鳥の声——実は笛をふきならす)

場面転換——舞台中央の傾斜がゆっくりと持ち上がる、その中が「山塞」である。

その B

山塞とはいいい条、穴のなかのようなところに、じ

いさまはじめ村人一同（小菊も）車座になって。

その前に、男。

男 (感嘆して) ほう。……そういうわけでぬしたち、百

姓の身ながら、奴をしとうて。

じいさま んだ。七年になるだな。

男 七年……

村人一 けんど、ほんまの袴垂れさまに行き会うたとき、袴垂れさまに知られて恥ずかしいようなことは、これっぽっちもしちゃいねえだ。

村人四 んだ、盗みはすれど非道はせずちゅう掟を、立派に守り通してきただ。

村人三 勝手にお名前を拝借したのは申しわけねえけんど、お名前を傷つけるようなことは、けっしてして来なかつただ。

村人七 その、ほかの衆にも、お名前拝借をすすめたのは、さらに相すまねえけんども……

村人二 これもそれも、袴垂れさまに会いてえ一心だったで！

村人六 んだ！ (涙ぐんでいる)

間——

村人一 さあ、こんだお前さまが話してくれる番だで、袴垂れさまのことを！

村人三 聞かしてけれ、お前さまは、いつどこで袴垂れさまに行き会うただ？

男 …… (何やらかんがえこんでいる)

村人六 いつ行き会うただ？

村人七 どこで行き会うただ？

男 ……（何やらかんがえこんでいる）

小菊 どうしたただね？

男 む？ うむ…そう、最後に奴めと別れたのは、と…

…あれは何年前になるか…一年…

村人一 一年…

男 いや三年…

村人三 三年前だが？

男 いや、もつとになるかな、五年…七年かな。

間――

村人四 あやしいだな、こら、ちっと。

一同 （声なくどよめく）

じいさま しっ、失礼をいうでねえ…で、そのころ、袴

垂れさまは、都で何をしとらっしやっただ？

村人一 多勢のご家来衆は？

村人二 袴垂れの党は？

男 袴垂れの党は、そのころ、もう、なかった…仲間割
れから、四分五裂に、

村人四 なかった？へっ、そんなことが――

村人三 袴垂れの党が割れるなんぞちゆうことが、ある
わけはねえだわ。

村人七 んだ、この衆はでたらめをいうとるだわ！

一同 でたらめをいうとるだわ！

間――

男 うむ、いかにも、でたらめをいうた……いまのは全部、うその皮だ。

一同 (どよめく)

男 おれは袴垂れなどという男、まったく知らん。ふん、多少虚名を得ておるにせよ、しよせん盗賊、たかのしれたすっぱの頭。

村人二 なに！（一同、総立ち）

じいさま これ！

男 盗むなら国を盗まんずる心ばえなくして義賊などとは笑止のかぎりだというておる。……（ニヤリとして）腹がへって、たまらねえ。実のところは、おぬしたちから飯の馳走にあずかろうと思うてな、心にもない出まかせをいうた。ふっふ、許せ、許してくれ、袴垂れの党の衆。（大笑する）

間――

じいさま 小菊。お飯をさしあげろ、お客人に。

村人二と四 じいさま！

じいさま (ためらっている小菊に) いうたとおりにしねえだか。

男 酒もほしいなあ、あるなら。

村人七 こ、この、

村人三 (こらえて) やい、掟をわすれただか？

村人一 ほんまの袴垂れさまはな、どんげなおかしな野郎にも、

小菊 にごにごと礼儀をつくしてもてなした、ちゅうだべ？

村人一と三 んだ。

じいさま (いとしげに) よう、わかっとなるだな、小菊。

小菊、仕度にかかる。

男 しかし、奇妙な話があるものだな……七年、か。ぬし

たち、それでまだ袴垂れに会えると、

村人一 きつと会えるだ。

一同 んだ。

男 ふむ。なんというたらよいか……いやらしい話だな。

(小菊の運んだ盃をとり上げる)

村人七 (小菊から酒壺をとり上げ、ついでやりながら) うひひ。

男 何がおかしい。

村人七 いや、その……にこにことしとるだわ。

一同 (喜んでへらへら笑う)

男 ふん。……(じいさまに) この住みかは、古いのか。

じいさま 五年ほどになるだな。冬のあいだはここに籠つて、春になれば揃うて旅に出るだわ。秋深くにもどれば、種子をまいておいた畑に、ようしたもので、なんとか食い扶持ぶちほどの実のりはあるだよ。

村人六 それはまあ、こやしの工夫もあるでな。

男 ふん。かしこいな、なかなか、おぬしたちは……それでは、今年も、

じいさま うむ、やがてはぶっ立つだわ。

村人四 例によってその前に、近在の長者めらを——(一

同にとめられて黙る)

男 ふむ、どつとばかりにおそうか。ふむ、……おどろくことというものは、あるものだな、やはり。(酒をしきりに飲む)

六 袴垂れさまはそうはしねえ

その A

山塞の附近の島。

村人たちの歌

たねをまけ

たねをまけ

実るたねあり

実らぬもあり

たねをまけ

たねをまけ

実らばうれし

実らずもよし（以下略）

村人たちが働いているさまざまなしぐさ。

そのなかを男が、悠然と歩いて行く。村人二が、

じいさまに近づいて、——ここは、たとえば麦踏

みで、二人が近づいて重なってははなれる感じが

いいだろう。そのあたりには一と七などもいて、

観客の眼には彼らが全体として交差してははなれ

るように見える。

村人二

じいさま。

じいさま 何だな。

村人二 あの男……いつまで居候きめこむつもりだかな？

じいさま 居心地がええと見えるだな。

村人二 よすぎるらしいだわ……やがて旅にも、つらなつてくるつもりじゃあるめえかな。

じいさま まさか、そんなことも、

村人二 あるめえたあおもうけんども、あるかも……じい

さま、実はな、あの男、小菊に――

じいさま なんだ？

村人二 (位置がじいさまと遠くなつたので、だまる)

じいさま 小菊が、どうしたちゆうだ？

小菊 (近くへ来ていて) 呼んだだけ、じいさま？

じいさま (二の様子をみてとぼける) はん？ 何かおらに用だか？

小菊 (二とみくらべて) ふん。(去る)

村人二 (またじいさまに近づいて来て) 目エつけたでは

ねえかとおもうだよ……あの男、小菊に。

じいさま はん？……あげな子どもにか？

村人二 子どもじゃねえだわ、もう。

じいさま はん。そうかな。

村人一と七 (確信をもって) んだな。

じいさま なるほど、ふん。するとつまり二郎太、こうなるだな、そんげにお前が肝オやくちゆうはこれすなわち、

村人一 (節で) 小菊二郎太、

村人七 (同じく) 二郎太小菊。

じいさま ちゅうわけだが？

村人二 ば、ばかいうなつて。小菊は、おらなんぞ、

じいさま はん、はや振られたただか？

村人二 いや、そげなわけじゃ、

じいさま ふむ、どげなわけだ？

村人二 ほかにいるだよ、小菊の惚れとる果報もんが。

じいさま ふむ、さてはおらかな。

村人二 ぷッ。

村人一と七 てへへ。

じいさま なにがてへへだ。だれだな？

村人二 袴垂れさままで、ほんまの。

じいさま ほん？ 見たこともねえ袴垂れさまにか？

村人二 見たこともねえから、なおのこと、ちゅうわけだ

で……

村人一と七 んだな。

じいさま ふうん。そげなもんかな、娘心は。

村人二 袴垂れさまに会うまでは、ほかの男に気はひかれ

ねえだな、きつと。

村人一と七 んだな。

じいさま ふうん。

村人二 だで、それまでは、おら小菊を守ってやりてえだ

よ、な？

村人一と七 んだな。

じいさま ふうん。

このとき、前出の鳥に似た笛が、のびやかに聞こえる。(たねまき歌がつづいていけば、ここで消える)

村人七 や、何か来ただな？

じいさま あの笛は、てえしたことはねえちゆう笛だな。

村人一 またきこりの衆でも迷いこんだかな？ そんならたっぷりもてなして、かてエロ止めお頼み申さねばならねえだが……

舞台の高みに、「三のC」に出た役人が、いまは山賊らしくすがたを変えて、子分三人引き連れてあらわれる。うち二人は、同じ場に出た下人である。

もと役人 やいやい百姓めら。

一同 へいへい、これはご立派な親分さま、(といいかけて、口々に)見たような顔だな——んだ、たしかに——あ！ いつかの——しッ！(など)

もと役人 やい、何をもぞもぞ。

じいさま こりやご無礼を。やいみんな、控えねえだかや
い。……そのう、親分さまは、どちらの親分さまでござ
りますかな？

もと役人 えっへん、われこそは世に名高い大盗袴垂れ。

一同 (どよめく)

じいさま これはこれは袴垂れさまでござえましただか。

して袴垂れ大親分さまが、こんげにまずしい山奥のおら
たち百姓に、いったい何のご用でござりまするかな？

もと役人 さしたる用もなければ、この山道に踏み迷う
て、腹はへる、酒は飲みたし——ほう、女もおるだな。

小菊 (あわてて二のあとにかくれる)

村人二 案ずることたねえ、あんげな弱え——ああ、あの時
お前はおらなんだな。

もと役人 ちかごろ稀なる上玉かな。叩き売ってよし、手
元においてなぐさむもまたよし。

村人二 な、なにをこの野郎、もうかんべん——

じいさま これ！ (と二をひきとめて) そのう、親分さ
ま。

村人一 袴垂れさまちゆうはそんげな、そのう——

村人三 おかたでございましたか？

村人一 はあ、おらたち何も存じませず、

村人四 ば、ばかぬかせ、こんげな袴垂れがあるもんだ

か、こいつアほれ、何年だが前――

一同 (ひきとめて) わかつとるッて。

このとき、いつのまにやらあらわれた「男」が、ぬうつともと役人の前に立つ。

もと役人 何だ、何だこやつ。

「男」が腰をひねるや白刃が蛇のように走って、あつという間にもと役人と子分ふたり、どうとばかり、倒れる。

それと村人たちが、

一同 あ！

と叫んで脅えて寄りあい、大きな凶体のやつの上
に小さな体のものが蟬のようにすがって、滑稽な
かたまりになった――と見えたのが、どっちが早
かったかおそかったか。

子分の一人がマリのようにとんで逃げて、

子分三 お助けを、おたすけを。(顔を地にすりつける)

男 おのれ、逃がすものか。

と血刀をふるって追いかけてようとすると、

村人一同 (かたまりになったまま、きびしく) いけねえだ。掟だ！

男 なに？

村人一同 (前に同じく) 袴垂れさまは、そんなことをしねえだ。

男 (笑って) おろかなことを。何をぬしたちは、こればかりのことにびくびくと――

いいかけて気づくと、脅えてかたまったかのように見える村人たちが、実はたくみな防禦兼攻撃の体勢をとっていて、たとえば上に乗った村人はカマをもっていかにも上からとびかからんばかりに――つまり、雲つくばかりの巨人が、何本もの手に武器をもって威嚇しているように見えるのである。しかもこの巨人、いつ何どき、たちまち七人(じいさまと小菊をのぞくとして)にわかれて蜂のように相手におそいかかるかわからないのだ。さすがに「男」も、鼻白む。

一同 袴垂れさまは、無益な殺生をしねえだ。

子分の三、実は間者、ニヤリと笑った。

間者 あ、ありがとうございます、ありがとうございます、ありがとうございます……

……

音楽。

その B

山塞。 村人一同と、すみに小菊も。村人た

ち、それぞれ、えもの道具類に手入れなど。

村人一 やい。んでは談合ぶつべえ。

一同 おう。

村人一 この奥山の根雪もすっかりと溶けただ。谷川もせいはずで幅アひろげて流れよるだし、花のつぼみもはちきれそうにふくらがってきただ。ことしも、春がきただよ。

一同 (いきおいよく) んだ。

村人三 つまり、ことしも、いよいよ旅に立つころあんべえだちゆうこった。

一同 (いきおいよく) んだ。

村人四 おら、へえ、もう毎年ねんのこつたで馴れたこつたたあ、いうもんの……

村人二 んだ。毎年ねんのこつたで、どうちゆうこともねえが……

村人七 いざ、冬ごもりから首をつんだす気分ちゆうもんは、その、

村人六 どんげな気分か、ちゆうなら、そら、やつぱ——

一同 ええ気分だな。(笑う)

じいさま んだ、まったくだ。どうだ皆の衆、旅仕度はええだか？

一同 おう。

村人六 肥やしほやしのほうなら、(胸を叩いて) だいじょうぶだ。

村人七 食いものくいもののそなえも、(胸を叩いて) まかせとけや。

村人一 そのほか、よろず、うまく行つとるだわ。

じいさま よし。んではいよいよ、

村人四 (力んで) 近在きんざいの長者ちやうじやうめらを、

じいさま 麓ふもとの里さとの村々むらむらのぐあいぐあいは、どうだな？

村人五 また地頭ぢちゆうや長者ちやうじやうがいばりだしとるだわ。

村人二 んだ。前の年まへねんに、おらたちがうんちゆうほどやつつけといたに——

村人七 金蔵かねぞうから米蔵こめぞうから、さらりさつぱり空つけつにし

てやったに――

村人四 いまじゃみっちり金なら米なら一杯だぞ。

村人三 それだけ村の衆の難儀は、ましとるちゆうこつたわ。

村人二 んだ。おらたちが金をわけたちゆうても、いまじやすっからかんの元通りだ。

村人六 前の年もそうだっただ。

村人四 前の前の年もそうだっただ。

村人二 (別に悲観ではなく) ぐるぐるまわりだな、こら。

一同 (おなじく) んだ、ぐるぐるまわりだ。

男が、このとき笑い出す。一同彼を見る。

村人二 やい、何だちゆうだ？ (皆に止められる)

男 おもしろい。……で、どうする気だ？ ぬしら。

間――

男 そのぐるぐるまわりを、どこで断ち切るつもりかというのだ……ふっふ、ことしもまた地頭長者どもをおそつたところで、あくる年の春までには、また、

村人四 また、おそやええだよ、おらたちが。

男 しかしそのあくる年には、また――

村人四 したら、また、おそやええだわ。(一同に) なあ？

一同 (うなづく)

男 (苦笑して) 果てしなくぐるぐるまわろうというわけか……ぬしたちの先も見えたな、どうやら。

じいさま あん？

男 もはや、行きづまりだという先が、さ。

村人四 へっ、つまっちゃおらねえだよ、どこも！ 長者どもが溜めたらぬすむ、ためたらぬすむ。どこまでも先アすうつと通つとるだわ。(みんなに) あんがい、頭、悪いだな、あいつ。

男 じい。

じいさま なんだな、お客人。

男 ぬしには見えておろう。おらぬはずがない。……なかなかのしたたかものだな、おぬしは。

じいさま はん？

男 答えろ。どう読んでおる？ ぬしたちの、この党の行きつく先の果ての話だ。

じいさま ……

一同、じいさまを見る。

間――

じいさま　ぐるぐるまわりではねえだわ。

男　なに？

じいさま　ぐるぐるまわりのように見えるだがな、おらたち。けんど実は、こんげに（と杖でラセンをえがきながら）渦を巻いとるだよ、ゆつくりのつたりと巻いとる渦だで……やがては、しんに寄つてあつまるだわ……そこに、

彼の、ラセンを描いた杖が中心でとまる。

村人一　そこに？

村人三　なにがあるだ？　じいさま。

じいさま　（きびしく）わかり切つとるでねえだか？　袴垂れさまがおるだ。ほんまの袴垂れさまに会うたとき、これまでのおらたちはおわつて、あたらしいおらたちになるだ。

男が大きく笑い出した。一同、彼をにらむ。

じいさま　（男がまるで気にならないように、和やかに）

さあ、談合をつづけべえ。んじゃ、さっそく今夜からの夜討ちのだんどりだが。

村人一　まず、東の里からかかるちゅう手配だわ。

村人三 長者館の攻め口はどうだ？

村人二 まもりが手うすなところちゆたら、やっぱ裏木戸だな。

村人五 けんど、裏木戸は下人衆や女子どもの寝どこに近
いだ。

村人二 だで、やっぱ高塀を越えるだな。

じいさま よし、それで行くべえ。ええな？

一同 おう。

男 (いきなり) ばかな。

一同 (男をみる)

男 (はきすてるように) まもりの手うすをねらうことの

ほかに、攻め口をえらぶものさしがあるか、夜うちをかけるに女子どもをかまっておれるか。なんとぬしらは――

じいさま 先へ行くべえ。火つけ口は？

村人七 それだ、屋形つづきに百姓家があるで、

村人六 こんだも、やっぱ、そっちにぬれむしろをかぶせ

てから――

じいさま む、それで行くべえ。

男 (前とおなじく) 一軒や二軒の百姓家は何だ。そのよ
うな手間ひまがあったら、

村人四 いけねえだ、そら！

村人六 袴垂れさまは、そんげなことをしねえで。

男 どうしてわかる、それが？

間――

男 (立ち上がった) きかせてほしいなあ。会ったこともない男のことが、なぜそのように信じられる? ……いったいその袴垂れというやつ、どのようなすがたかたちをしておるのだ。年のころはいくつだ、背は高いか低い、どのような声音の男だ?

間――一同顔を見合わせる。

村人一 そういや、昔アよく、

村人三 どんげなおすがたのおかたかちゆうて、話し合うたもんだが、

村人二 んだ、いつのまにやら、

村人四 考えねえようになっちまっとつただな。

村人七 その、おらはだな、昔ア、筋骨たくましい、年のころなら四十がらみの――ちゆうて、おもうとつただ

が、いまは、その……(なんとなくじいさまをみながら) こう、やせこけて、すねの長え、髪のまっ白え……

じいさま 何だ、そら、おらみてえでねえだか。

村人七 いや、じいさまよりや、その、だいぶん品のええじいさまではねえかな。

一同 (笑う)

小菊 おら……

一同 (小菊をみる)

小菊 おらも、何だやら、杉みてえに背の高えおかたでは、ねえではねえかと……

じいさま わかつとるだ、小菊の袴垂れさまはな、若くて色の黒え、けんども二郎太よりやだいぶんたのもしそうな男だわ。

一同 (どっと笑う)

村人一 じいさま、そんじやそろそろ、

じいさま よし。出かけべえ。

一同 おう。

暗転。音楽。

七 本ものさまとも存じませず

山寨の付近。夜。

小菊ひとり。

小菊 さあらさあら

川に聞こうか

そよらそよら

風に聞こうか

おらが殿御は

どこの国

いつのまにか月光のなかに「男」があらわれる。

小菊 (気づいて) 行かなかったのけ、今夜は？

男 ……

小菊 んだね。だれも手助けたのんだわけじゃねえでね、
おめえさまに。

男 ……

小菊 あのな、おら、おもうだがね……出てったほうがえ
えだよ、はやく。

男 何故だ。

小菊 うわさがあるだな。——おめえさまは、へえ、里へ

下りて村の衆の衆のもんをかすめたり……おなこ女子を、

男 悪いか。何故悪い、それが。

小菊 袴垂れさまはそんなことを——

男 さあ、どうだかな。やはり、人だからな、袴垂れも。

おぬしらのいう本ものの袴垂れも。……人であること
は、おぬしの仲間たちも同じなのだがな。(うすく笑う)
人ではないように見えるがな、ときどき、わしには。

小菊 (黙って出ていこうとする)

男 まあ待て。……たとえば、昨夜、東の長者屋形をおそ
うたときのこと、いや、その前、宵の打合わせのとき、
火つけ口をきめるについて、

小菊 屋形つづきに百姓家があるので、まずそっちの屋根に
ぬれむしろを、ちゆうて——

男 それだ、例えばそれだ。そのようなおろかな心くばり
のために、現に、昨夜は危く仕損じるところだったの
だ。早くも役人どもが押っとり刀でかけつけて、逃げお
くれたじじいをとりまき——

小菊 その役人衆をのこらず斬り倒した、ちゆうだべ？
お前さまが。

男 斬らねば、斬られたところだ、じじいが。

小菊 (笑って) じいさまにかぎって、そげな、はは、き
つと「へえおら火事見舞いに参りましたが」なんぞッ
ちゆうてごまけて逃げて来ただわ。はっは。

男 かもしれぬ。としてもだ、何故、好んで無益の危い橋
を、ぬしらは、

小菊 (ムキになって) だで、そら、ほんまの袴垂れさま
に会ったときの——

男 会いたいか、小菊。

小菊 (じろりと見る) ……

男 会わしてやるぞ。

小菊 だまされねえでよ、おらは。

男 お前をだまして何になる。天地にかけて偽りではないぞ、これだけは。

小菊 知らんちゅうたでねえか。

男 知つとる。誰よりもよく。いや、天下におれひとり
が、袴垂れを知っておる。……真実に向きあわしてやる
う、小菊。

小菊 (間) もしや……死んだちゅうのか？

男 生きとる。ここにな。

小菊 え？

男 おれだよ。おれが、ほんものの袴垂れだ。

間。月の光が白いだけ。

小菊 (おかしくてたまらぬように笑いはじめる)

男 信じられまい。真実というもの、しばしば信じにく
い。しかし、おそかれ早かれ、いかに信ずるに辛い真実
でも、のみこまざるを得なくなるものだ……おなじこと
なら早いがよからう。たしかめる方法があるぞ。都の役
人、それも七年前、牢役人をつとめておったものがよい
な。両三度の破牢をまんまとなしとげた男のすがたかた
ちを、よもや忘れはしておるまい。おれの似顔でも書い
て都へのぼることだ。いかに都が荒れ果てたにしても、

根気よくさがせばおれを知った役人に行き当ろう。

小菊 (もう笑顔ではない) ……

男 どのような男とおもうておった? ……ふっふ、すまぬことだ。おぬしの夢を木っ葉微塵に打ちくだくなど、もとより本意では——いや、本意かもしれぬ、これが、おれの。おぬしやほかの善良な百姓どもの夢をだいに、このままそつと立ちさろうとかんがえたのもおれなら、おぬしら一同のやりくちを面白半分わかからながめているうちに、いらいらとこらえきれぬようになったのも、おれだ。こういう男だったよ、昔から、おれは。……しかし、もう、きまった。おぬしに真実をあかしたことでおれは道をえらんだことになった。こんにちただいまから、おれは袴垂れにもどるぞ。袴垂れはおれだ。欲するにしたがって人も殺そう、金も盗めば女もうばおう。これが袴垂れだ、真実の袴垂れだ!

小菊 嘘だ、でたらめをいうとるだわ!

男 嫌いらしいな真実が、やはり、小菊……だがもはやおぬし、夢とあこがれで勝手放題うつくしく刻みあげた袴垂れの像のみ、その小さな胸に抱きつづけることとはできぬ……にせものだからな、それは、おぬしのほんものは。嘘だからな。

小菊 (逃げようとしたのをつかまれて) あ!

男 肘までぞっぷり血に汚れた腕に抱かれろ、小菊。

小菊 は、はなせ！ 臭い……

男 (はなさず) 真実が臭いというわけだな？ 生きた男の匂いが、おぬしのあこがれて育った袴垂れの生身が――

村人二 (とびこんで来て) や、やい、小菊を、手前、

(体当り)

男 (素遠くかわして刀のこじりで当身)

村人二 (倒れる)

小菊 二郎太！

と、すがりつくが、村人二はうめくばかりで動けない。

男 (周囲にむかって) 出て来い。……先ほどから、お揃

いの気配は知れておった。殺気が満ちたにしては、吹き矢もとばなんだが、娘に当るのをおそれてかな？ ふっ

ふ。いや、それより、ぬしたちの掟にそむくことになるからな、万一にもわしを殺しては。はっはは。……さ

あ、出て来い。

じつわま へへ。(まず出てくる)

つづいてまわりのやぶかげから、村人一同、出る。

男 揃っておるな、やはり。……さてと、そこで談合だが、いまの話、くりかえすこともなからう。……や、もうひとり、おるな、すがたをかくして……

じいさま へ？ そんげなはずは——

男 出て参れというておる。……来なければ、こうだ。

小柄を放つと、樹の上からどさりと黒い影が落ちる。「六のA」場で助けられた子分の三、実は間者。

村人一 (かけよって引きおこす) や、こらあ、こないだの、

村人五 (一方を指して) あ！ あらあ！

樹の上から、白い煙りが吹き出している。

じいさま のろしをかけたな？

男 (体をあらためて) 役人の手先か。やはり斬っておけばよかった。……(一同に) ぬしらのおろかな情が、こ
ういうむくいをうける。思い知るがいい。

間——

男 ともあれ、こうなつては逃げるが先だ。行こう。

じいさま いや、その前に……（うやうやしくひざまずいて）何ともはや、ほんまの袴垂れさまとも存じませず、おらたちはとてつもねえ無礼を……お許しくださいませえまし。（動かない一同に）やい、ほんまの袴垂れさまだぞ！……待ちに待った本物さまだぞ、七年の苦勞が実つただぞ！

一同 （動かない）

じいさま やい、さっきのお話を聞かなかつたちゆうだか？ ほんまのことは、やつぱ、こら、ほんまのことだ……おらたちにせもんの掟は、ほんものさまに出会うまでの掟だ。……（しほりだすように）おらたちの党も、ここまですぞ。……おら、もう指図ア出さねえだぞ。これからア、ほんものさまのいう通りだぞ。ええな？

一同、しだいに、力がぬけたように坐る。

村人四 おら、……おら、（じいさまにじつとにらまれて、これも坐る）

男 （うなずいて）では、このち統領におれがなるにいついて、不服はないな。

じいさま へえ、そらアもう。

男 よし、ともかくこの山を去ろう。急がぬと役人どもが、

じいさま なに、あわてることはござえませんが、たかのしれた木っ葉役人……それより、何か、その、おことばを……このままではみんな、へえ、不安でならねえ様子で。

男 うむ。もつともだ。ではいうて聞かせよう。これから山を下って第一の仕事は、諸々方々にひそむという、袴垂れを称するにせものどもを、残らずあつめることだな。本物がこうしてあらわれたということを、津々浦々に告げ知らせて、一刻も早く来たりつどえとよびかけるのだ。そして真実の袴垂れの党を、巨大なすがたにつくり上げるのだ。そして……そのさきことはひとまずおこう。

じいさま 掟は？ 新しい、ほんまの掟を、どうか……

男 袴垂れの党にさからうものは殺す、行手をはばむものはすべて殺す。党のなかでは、おれに従わぬものはただちに殺す。これだけのことよ。あとは心まかせ、うばった金銀は手柄しだいの取り放題、女がほしくば腕しだいの盗み放題だ。それが人の性さがというもの。本性を無理におさえてはかならず裏切りが生まれる。はては党を割ることもなる……が、というて、これだけでは策として下の下だ。えものを争い女を争うて仲間同士血を流すば

かり、ということにもなりかねぬ。そこで、おれのみるところ、ぬしたちのこれまでのやりかたにも取柄はある。清廉潔白は人気を呼ぶからな、たしかに。

じいさま ——ツちゆうと、どんげなことに？

男 仲間を、増えるにに応じて二手ふたてにわけようとおもう。一手ひとは盗み、うばい、殺すがよい。一手は、金を村人にわかちあたえ、殺さず、おかさず……双方ともが袴垂れだ。が、一方は名乗らず、一方は名乗る……

じいさま なるほどなるほど。んじや、おらたちはその、わかちあたえて殺さねえ方で。

男 いや、時おり、役割を入れかわるのだな。だれもが双方の手に、たとえば月がわりで加わるとしよう。

じいさま そ、そげな——一人の人間が、そんげな、それら、とても。

男 ほう、出来ぬというのか？ 人を殺したり、また、いつくしんだりは出来ぬというか、おなじ一人の人間には？ ……おれはそれが出来るものだ、いや、むしろその双方をかわるがわるにするものこそ人というもの、いずれか一方にかぎってしまえば、かならずいつか無理が来るのが人間の真のすがただと、そうおもわれてならぬのだ。なればこそ、この仕組みを案じ出したのだ……ふふ、ぬしたち、まずは殺しうばう手にまわって、七年の間こらえにこらえた五欲をおもうさま充たすがよかる

う……

突然、矢が飛来して樹の幹の高いところあたりに立つ。ほか、一、二本、いずれも遠くから射かけた感じで。

ときの声が湧く。

男 しまった！ もう来おった、やつら！

じいさま 裏道をぬければええ、さあ！

男 む、皆、急げ！

と背中を見せて行きかけたとき、じいさまが体を丸めてぶつかった。手に短刀。

男 うわっ。(よろめく) じい！

ふりむきざま刀をぬき放った、そのふところへ五が、

村人五 くそ！

男 ううむ…… (よろめきながら、刀をふるう) やい！

……やい百姓ども、ぬしらは、阿呆だぞ！ ……おれを殺して、この先、どうやって……どの道、ぬしら、行手

は聞、……おれの道しか、ありませんのだ……おれの…

…

じいさま つべこべいうでねえだわ！

どつと、一同が同時に男を押し包んだ。はなれた
ときには男は、ぐたりと膝をついた。

男 (苦しい息で笑う) ふふ、ふふふ……とうとう、殺し

たな、ぬしら……どうやら、これでぬしら、袴垂れ……

ほんものの袴垂れに、なったな……

じいさま 何？ 何ちゆうただ？

男 手をみる……ぬしらの、まっ赤に汚れた手を……それが、袴垂れだ……(死ぬ)

間——

するどい月の光と、近づく鬨の声と、時折、しだいに繁く飛来する矢と。

じいさま (がつくり、くずおれかけて) おら……わから

ねえだ、おらのしたこたあ……ゼンてえ……

村人一同 じいさま！ しっかりするだ！ 役人が来ただ

ぞーやい！

じいさま (一瞬、われに返ってしゃんとして) 集まると

ころは天狗岩！

馴れた手つきで、胸にさわって「散れ」のサイン

一同 (低く) おう！

たちまち、かき消すように一同消える。地下トンネルにもぐりこんだのであろう。

じいさま一人、一同の消えるのをみとどけて消えようとすると、その時矢がぐさりと胸板にたつ。

音もなく倒れ伏すじいさま。

矢がしきりに飛来する。

八 サア旅をつづけよう

朝。霧の深い感じ。

「天狗岩」らしきところ。

四、五、六、七、と小菊。

しばらく沈黙。

村人四 やっぱ……来ねえだわ。

村人七 おうーいッ！

こだまが返ってくるだけ。

沈黙。

村人七 来ねえだわ、誰も……やっぱ。

沈黙。

村人四 (六に) やい、泣かねえだな、手前。

村人六 なんだ？

村人四 こんげな時ア、手前の泣く時でねえだかよ。

村人六 んでも、へえ……

村人七 んだ、手前はやっぱ、泣きつづけにや、いけねえ

ではねえかな。

村人六 んだな……んじや、泣くべえ。(試みる)

間——

村人六 泣けねえだな、おら……どひょうしもねえ悲しい

だに、やっぱ、泣けねえだな、どうしたわけだか。

村人四 もう、ええだわ。

間——小菊がひっそり泣いている。

村人七 小菊が、お前のかわりやってくれとるだわ。

村人四 泣くでねえだ、小菊……

村人七 二郎太がおッ死んだちゆうは、むげえこつたが、

村人四 んでも、おらたちがついとるに。

村人六 んだ、ついとるに……（気づいて）はあ、誰れかが泣くツちゆうは、ほかのもんが、なぐさめたり、どやしたりできるツちゆうこんだな。それで、おらが泣くのは、ええこんだつたツちゆうわけだな……んでも、おらは泣けねえだな、もう……

村人五 おら……（みな、五をみる）おら、小菊にやすまねえけんども……仲間の衆がもしおッ死んだとなりや、

悲しいけんども……

村人四 何をいいてえだ？ やい。

村人五 なぜだが、おら、気が晴れた——みてえでなんねえだよ。くいの村で地頭の息子をぶつ殺してこのかた、一日だつて晴れたこたねえ、どえれえながえさみだれどきみてえな、おら、何ちゆうか……それが……

村人四、六、七 （顔見合わせていやな顔をする）

村人五 （小さくなって）すまねえだな、ほんまに……
んでも、その……わからねえだか？

村人四、六、七 わからねえだ。

小菊が、崖っぷちまで進み出た。
気がついて皆あわてて、

皆 お、おい、どこへ行くだ！

小菊 (呼ぶ) どーッこいしよーッ……

こだまが返ってくる。

と、そのなかに、かすかに、

「やーッこらしよーッ」

と合言葉が帰ってくる。

皆 (総立ちで) やや！ (いっせいに) どーッこいしよ

ーッ！

声 やーッこらしよーッ！

大勢の、それはとても大勢の、「やーッこらしよ

ーッ！」がひびき返して来て、鳴り渡る。

舞台は場面転換して――

× × ×

暗転中、鳴り物よろしく。幕間狂言のときのもの

とおなじものが望ましい。

パツとあかるくなると、晴れた山道に、ずらり勢揃いした一同。もちろん小菊も。じいさまと一、二、三、はそれぞれ、のどもとや胸、腹などに、矢や折れた槍などを貫き通したまま。もちろん、血も流れているだろう。

村人一

(のびやかに) きょうもええ日和だな、

村人二

んだ、このあたたけえお日さんを、

村人三

ほくほくと浴びて歩んで行くなら、

村人四

(力づく) んだ、なんやら、きょうのきょうこ

さ——

そのとき、あの「男」の血に染んだすがたが浮か

ぶ——

男の幻影

手をみる……ぬしらの、まっ赤に汚れた手を…

…それが、袴垂れだ……(消える)

静止した一同——しかし、彼らは、何もきこえなかつたかのように——いや、確実にきこえているのだが、あえてそうするのだろうか。

村人五 (前の「四」につづけて) ほんまの袴垂れさまに

よ——

村人六 正真正銘の袴垂れさまに——

村人七 きっと、行き会えるっちゅう心持ちがしてくるだ

わ。

小菊 んだ。なあ、じいさま？

じいさま んだ。まったくだ……

ふたたび、「男」のすがたが浮かんた。

男の幻影 手をみる……ぬしらの、まッ赤に汚れた手を……

……それが、袴垂れだ……

一同、無表情に、しかし昂然と顔をあげる——

じいさま んでは皆の衆……元気でぶっ立つとすべえ。

一同 んだな。

一同、歩きはじめる。

歩きつづける。

一同の歌 旅をつづけよう

果てしない旅を

袴垂れを探す
袴垂れの党

泣くのは恥だ
笑って行こう
生命をかけて
袴垂れの党

旗もなければ
頭かしらもない
どこへ行くやら
袴垂れの党

幕